

島本町文化財調査報告書 第六集

# 詩歌としまもと

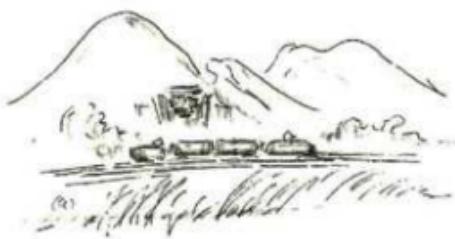
歌枕「水無瀬」をめぐって

島本町教育委員会



# 詩歌としまもと

歌枕 「水無瀬」をめぐつて

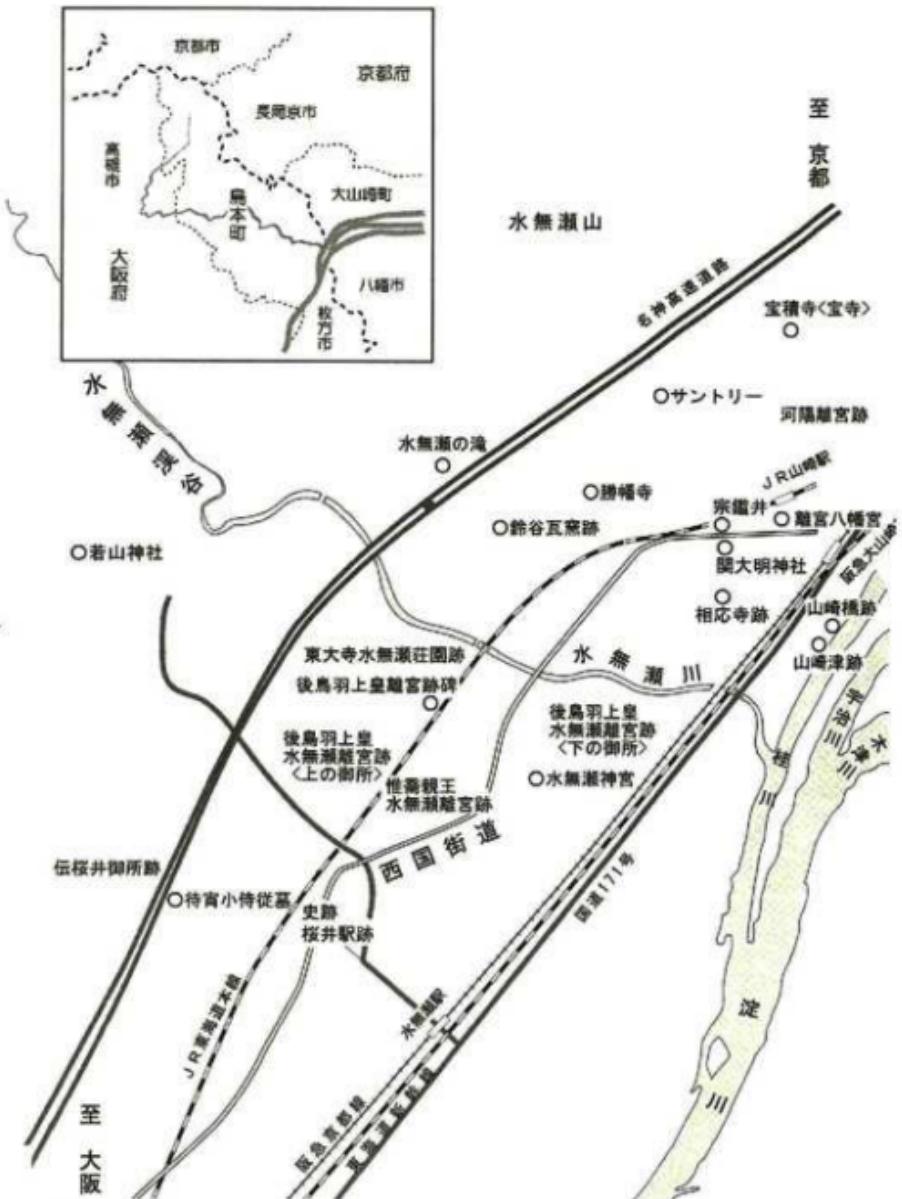






「山崎通分間延絵図」(水無瀬川付近絵図)





詩歌に關係する島本町の史跡・名勝地図(島本町周辺地図)



## ごあいさつ

私たちのまち島本は、桂川、宇治川、木津川の三川合流地点にあたるとともに、古代からの道である西国街道が町の中心を貫き、京都→大阪、さらには西国とを結ぶ水陸交通の要衝として発展してまいりました。

近年、わが国の経済成長と共に京都、大阪といった大都市近郊に位置する島本町は、島本で生まれ育った方たちに加え、新しい住民の方々の増加によって、人口三万人を数える町に成長してまいりましたが、今なお、史跡や文化財が多数遺されるとともに、歴史的な環境が良好に保存された歴史文化の薫る町です。

このようなわが町の大きな構造変化に対して、古くからの住民の皆様には改めて郷土の歴史を認識していましたとき、新しい住民の方々には本町を第二の故郷と思っていただけるように、教育委員会では町内に所在する文化財の紹介に努めてまいりました。今回発行いたしました小冊子「詩歌としまもと」は先に刊行いたしました「モノと環境の民俗誌」に続き、本町の歴史・文化を紹介するものです。本書を通して、皆様方の郷土の歴史に対する理解や学習に少しでもお役に立てれば幸いです。

平成一六年二月

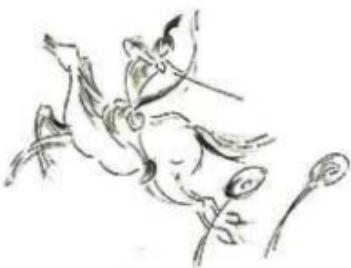
島本町教育委員会教育長

日高久和



凡例

- ・底本は基本的に「国歌大観」を用いた。
- ・歌集によって同じ内容の歌の漢字や仮名づかいが異なる場合は原則として、歌人の私歌集に収められている歌を用いた。
- ・底本に反覆記号「く」が用いてあるものについては、仮名または漢字に改めた。
- ・底本の旧漢字は常用漢字に改めた。
- ・本文中における「」(二重かぎ)は、書名・雑誌名をくる場合、あるいは「」(かぎ)の中にさらにはかぎを用いる場合に使用している。
- ・本文中における和歌の訳は、諸々和歌集の解釈に委ねた。ただし注釈のないものは筆者の訳とする。
- ・本稿では便宜上、後鳥羽天皇は後鳥羽院、後水尾天皇は後水尾院と表記する。
- ・本文中の数字は漢数字で表記し、一、二、三、四五などとする。
- ・本報告書の執筆は植田直子が担当した。



## 【目次】

「あいさつ

はじめに

### 第一章 水の無い川

地名の由来／「万葉集」の水無瀬川／水無瀬野への行幸／  
河陽離宮と山崎／「伊勢物語」の水無瀬／平安王朝時代の和歌／  
歌詠「水無瀬川」の変遷／実在の川へ

### 第二章 後鳥羽院と中世和歌

後鳥羽院と王朝歌人／水無瀬離宮の造営／水無瀬釣殿当座六首歌合／  
水無瀬殿恋十五首歌合／歌枕「水無瀬川」／名所「水無瀬」の誕生／  
障子画に描かれた水無瀬／後鳥羽院歌壇の水無瀬／春の水無瀬を詠む／  
承久の乱



第三章 泰平への祈り

49

御影堂の建立／【水無瀬・吟百韻】／水無瀬殿御法楽／

文学の神・後鳥羽院

第四章 近世の和歌——古典の継承とその解釈

王朝文化への憧憬／後水尾院と堂上歌壇／島本と後水尾院／

後鳥羽院への追悼和歌／和歌の伝承／地下歌人の出現／

国学の始まり／本居宣長の名所研究／上田秋成 虚構の水無瀬川／

国学者たちの水無瀬

第五章 伝統の終焉と再考

明治維新／後鳥羽天皇七百年御式年祭／変わらない風景／

郷土文化の再考

あとがき

付録

插图

坂根  
瞬



## はじめに

大阪府三島郡島本町——、京都府との府境に位置するこの町は、桂川、宇治川、木津川の三河川が合流した淀川の右岸にある。町の北側には天王山、淀川の東側には男山おとこやまがあり、これらの山々が扇状に島本の町をとり囲んでいる。現在は大阪と京都の中間地点という立地からベッドタウンとして大きく発展している。

山と川に恵まれたこの緑豊かな町は、行政の区画上は大阪府に入るが、隣のぎわいをみせる高槻市よりも京都府の大山崎町に雰囲気は近い。都の玄関口に位置しているからだろうか、どこか京都を感じさせる風情を残している。

かつてこの土地は、河川の中継地として多くの人々が舟を乗り継ぎ往来した。また古来、京都—大阪—兵庫を結ぶ西国街道が通つており、水と陸の便に通じた交通の要所として栄えてきたのである。

なだらかな山々を背景にゆつたりと流れる水無瀬川の景色は、日本の原風景として、町を往来する人々の心を捉えてきた。

見渡せば山もとかすむ水無瀬川

夕べは秋と何思ひけん

(水郷春望・元久詩歌合)

この歌は鎌倉初期に在位した後鳥羽院(一一八〇  
一二三九)が島本町に御遊した際に詠んだ歌であ

る。見渡すと山のふもとに霞がかかり、そのなかを  
流れゆく水無瀬川は趣き深い。秋は夕暮れ<sup>(一)</sup>といった  
ものだが春の夕暮れもなかなか情趣があるではない  
か、という内容である。近年、後鳥羽院を歌人として  
積極的に再評価し、評伝「後鳥羽院」を著した丸  
谷才一氏は、この歌を「和歌史上最高の作品の一つ  
と呼んでいいかもしれない」<sup>(二)</sup>と評した。

この歌に詠まれた水無瀬川とは、町の背後に連な  
る糸迦岳<sup>じやかだけ</sup>を水脈に淀川へと合流する小さな支流のこ



三川合流

とである。<sup>レーリー</sup>瀧々と流れる水無瀬川の向こうになだらかな山々が連なるこの土地は、奈良時代から天皇、貴族の遊獵地として栄えてきた。後鳥羽院の時代には水無瀬離宮が造営され、ここに多くの歌人が集い、歌を競いあつた。上句はその中の一首である。

多くの文人が島本町の景勝をたたえ、たくさんの歌が詠まれている。現在の島本町はペッドタウンとしてのイメージが強いが、元来、京都と大阪を結ぶ水陸の要地を背景に独自の歴史と文化を形成してきた。とりわけ後鳥羽院が御遊したという「水無瀬」は文学史的にも名高く、<sup>うたばく</sup>歌枕として親しまれている。

歌枕とは、一般に歌の中に詠みこまれた諸国の名所、地名のことを指す。当初、学校教育で受けた「奥の細道」などのイメージから歌人が実際にその土地に赴き、そこで見た風景に感慨をおぼえ、その地名を歌枕として詠むものと捉えていた。しかし今回調査していくなかで、歌枕は、自由に旅ができなかつた時代に、訪れたことのない名所に憧れ、いつかは訪ねてみたいという思いから伝え聞いた名所や地名を詠みこんだものもあることを知つた。

このように歌枕や名所図会などは、その土地の風景や情緒



島本町と淀川対岸の男山。男山も歌枕として歌に詠まれた。

といったものを追体験させる装置として人々に享受され、発達していったのである。島本町の周辺には水無瀬以外にも桜井、山崎、石清水八幡を祀る男山などの名所がある。これらの土地もまた歌枕として詠みこまれているが、今回の調査では、初めに貴族文化が花開いた水無瀬に焦点を当ててみたい。

それでは島本町の水無瀬を詠んだ歌にはどのようなものがあるのか、その定義を明確にしておこう。まず水無瀬の歌として、先述したように歌枕「水無瀬」を詠みこんだものが挙げられる。歌枕の他には水無瀬で行われた歌会で詠まれた歌もこれに入れたい。水無瀬で開かれた歌会では水無瀬を歌の題としたものもあれば、そうでないものもある。水無瀬を歌題としていない歌を島本の歌と定義することには異論があるかもしれないが、町の歌の歴史を理解するうえで重要な役割を果たした歌会で詠まれた歌は水無瀬の歌として含めるべきものとする。

また、水無瀬を歌題としておらず歌会も当地で開かれてはいないが、後鳥羽院の菩提所として建立された水無瀬神宮に後鳥羽院を追悼する歌が数多く奉納されている。それらの歌もこの範疇に入れたい。以上、歌枕「水無瀬」を詠みこんだ歌、水無瀬で詠まれた歌、水無瀬に奉納された歌、の三種類の和歌を原則として島本町、水無瀬の歌と定義する。

奈良時代から詠まれた主要な和歌、歌合を収めた最大の辞典「国歌大観」には、「水無瀬」を詠んだ歌が数多く所収されている。ただしすべての歌が島本町の水無瀬を詠んだものかという問題点はある。全国には同名の地名がいたるところで散在する。例えば水無瀬の場合、同名の地名に因幡国智頭郡美成(鳥

取県東部)が挙げられる。この土地に関しては、歌枕として詠まれた形跡は見当らない。

では、やはり水無瀬(島本町かといえば、そつともいえない。実は水無瀬という言葉は和歌の中では、水がなく瀬が表れている川のことを指しており、その意味では、どこにでもある普遍的な場所といえる。水の無い川がいつごろから島本町の水無瀬を特定して詠まれるようになつたのか。その歌枕が生成される過程を明らかにすることによって、「島本町の水無瀬」と「水の無い川(水無瀬)」に分けることができると考えられる。

\*

特色ある島本町の歴史と文化、なかでも貴族文化に彩られた水無瀬の詩歌をより多くの人たちに知つてもらうため、今回の詩歌調査は島本町教育委員会の文化行政の一環として出発した。当初は町の歌枕がどれくらいあるかを調べ、歌集を作成することが目的であった。現代の私たちにとって古典である和歌を、原文で理解することは困難に思われた。

また、単に歌枕「水無瀬」が詠まれた歌を集めるということは資料としては有用かもしれないが、水無瀬の歴史、文化を理解することには直接つながらない懸念があった。そこで本稿「詩歌としまもと」は、奈良時代から昭和初期までの和歌の中で詠まれた「水無瀬」を手がかりに、歌の背景や歌の通釈を交えながら、島本町の歌を紹介するという試みをおこなうものである。

本文は、大きく二つに分けられる。前半は、「歌枕「水無瀬」の成立過程」についてこの時代に詠まれ

た歌を紹介しながら考察を加える。また、水無瀬に離宮が造営され、和歌が盛んに詠み競われた「後鳥羽院の時代」を取り上げ、後鳥羽院とともにこの時代に活躍した藤原定家とその周辺の歌人たちの歌会を検証していく。

後半は、隱岐に流され無念の死を遂げた後鳥羽院を追悼する行事が、水無瀬を中心が始まるのであるが、その背景と後鳥羽院追悼和歌について考察する。そして後鳥羽院によつて築かれた和歌の伝統が貴族から堀野を広げ民間へと受け継がれていく「伝統の繼承」と、その伝統が途絶えていく過程を追つた。それでは、ここから島本の歌物語を読み解いていきたい。

### [注]

- (1) 「枕草紙」の「秋は夕暮れ」など、秋は夕暮れが良いという一般的通念に対しして。
- (2) 丸谷オ一『日本詩人選10 後鳥羽院』筑摩書房 昭和四八年 二〇頁
- (3) 江戸後期に刊行された、各地の名所・街道・寺社などの来歴・伝説・名物などを織り込んで説明した通俗地誌。

# 第一章 水の無い川



水無瀬川(春の風景)

## 地名の由来

大阪府三島郡島本町は、南に桂川、宇治川、木津川の三河川が合流した淀川が流れ、北に天王山をのぞみ、古くから山水の景勝の地として知られている。西国街道が通り、京都と大阪を結ぶ河川の中継地として水陸に通じ、古来、交通の要衝として発展してきた。

本稿の中心舞台となる水無瀬川は天王山から淀川へと注ぐ小さな川である。水無瀬川は山からの堆積物によって両岸よりも川床が高く盛り上がった天井川(地表に水があらわれないで地下を伏流する川)で、川底にわずかな水しかたたえていない。水は水無瀬



渓谷の伏流水となつて島本町を潤している。この町から湧き出る水はとてもおいしく、水無瀬神宮の井戸水は大阪府下で唯一全国名水百選に入っている。

地名の由来は「古代地名語源辞典」によると、この島本町あたりは、山が両側から迫つた谷の部分を淀川が流れしており、瀬になつていることから、「水が瀬になるところ」、つまりミノセ(水の瀬)が転じたものとしている。

本来の水無瀬川にほとんど水がないので、「水の無い瀬」から来たものと思うが、辞典によると水無瀬川が水の無い川から来たというのは文字からきた連想で、もともと「水無瀬川」は淀川本流に名づけられた名と推測している。また、現在の水無瀬川は、むしろ水無瀬あたりを流れる川という意味で命名されたようである。

### 【万葉集】の水無瀬川

その水無瀬川であるが、この川の名を詠んだもつとも古い歌が「万葉集」に一首収められている。「万葉集」は奈良時代後半に成立したといわれ、四千五百首、二〇巻からなる長大な和歌集である。それは、「万葉集」に収められた二首を見てみたい。



大阪府下で唯一の名水百選(水無瀬神宮内)

うらぶれて物は思はじ水無瀬川

ありても水はゆくといふものを

(私はうちしおれて物思いはいたしますまい。水無瀬川であつても水は流れるということですか)

恋にもぞ人は死にする水無瀬川

下ゆ我れ瘦す月に日にけに

(笠女郎)

(恋の苦しみのためにだつて人は死ぬことがあるもの。人知れず私はどんどん痩せ細るばかりです。  
月」と曰ことに)

「万葉集」は成立期間を四期に分けるのが定説とされており、柿本人麻呂は、二期の天武天皇の時代から七一〇年の平城京遷都まで活躍した代表的歌人である。かきのみのひとまろ笠女郎は第三期にあたり、平城京遷都後の奈良時代後期における代表的な女流歌人である。

どちらも恋歌であるが、その内容と水無瀬川との関連が一見よく分からぬ。「日本歌語辞典」によれば、「水無瀬川」は「水が伏流水となつて流れる川をしめす非限定的な名詞であり、また古く万葉集の恋歌においては、水が面(表)には流れないように、想いを忍ぶ様子を表現する歌語(和歌に用いられている

(柿本人麻呂)

ことば「筆者注」としても用いられた」という。町内を流れる水無瀬川と万葉の時代に使われていた水無瀬川には大きな概念の隔たりがあるといえよう。

少し文法にも触れておきたい。水無瀬川の後に「あり」「下ゆ」という語が続いている。川の水が下に流れるところから、「水無瀬」は和歌表現において「下」を導く枕詞として、水が瀬の下を流れる状態を恋の比喩として用いられるのが一般的であった。枕詞とは、ある言葉の前におく修飾語である。例えば、あをよし(青丹よし)——奈良といった枕詞は広く知られているが、ここでの場合、水無瀬川は「下」を導くのである。

等女郎のいう水無瀬川は「下」を導く枕詞として用いられており、人麻呂のは「水の無い川」を直接的に捉え、「無い」に対して「ある」と転じた歌である。

二人の詠んだ水無瀬川は、ともに恋心を表に出せない自身の状態を、地下に流れている川にたとえたものである。したがって万葉集時代に水無瀬川は歌語としては存在していたが、ここでの水無瀬川は架空の川であり、特定の地名を示す川として用いられていなかつたといえる。

### 水無瀬野への行幸

延暦一三年(七九四)、桓武天皇は都を平安京へ遷した。島本地方は都が平安京に遷されたことによつて、都から西国へと向かう交通の要衝となる。山崎の津(港)は平安京の外港となり、西国街道(山陽道)

## 河陽離宮と山崎

遊獵の際には山崎周辺にも足を運んでいる。次に島本町に隣接する大山崎町に建てられた河陽離宮について少し触れてみたい。

年号	出来事
延暦11年～延暦23年 (792～804)	桓武天皇、水生野に遊獵
弘仁2年～弘仁13年 (811～822)	嵯峨天皇、水生野に遊獵 弘仁5年ごろ河陽離宮造営
天長8年～天長9年 (831～832)	淳和天皇、水成野に遊獵
承和2年～嘉祥2年 (835～849)	仁明天皇、水成瀬野に行幸

表① 天皇の水無瀬への行幸

には山崎駅が置かれ、水無瀬周辺は物資を運ぶ人々によってにぎわいを見せたという。

平安京遷都前後に、都からほど近く自然に恵まれた水無瀬へ遊獵に出掛けるようになった。「狩獵を好み各地に遊獵を行なった桓武天皇や、万事に派手好みで遊覧に明け暮れた嵯峨天皇の治世には、水無瀬野への行幸が頻繁に行われた」という。<sup>〔3〕</sup> 表①は「島本町史」を参考に天皇の水無瀬への行幸を年代に分けてまとめたものである。

天皇の行幸は平安京遷都前にはじまり、仁明天皇在位中の嘉祥年間で終了していることが分かる。また「みなせ」の表記を年代順に追うと「水生野」から「水成瀬野」へと変化している。ここでの「みなせ」と歌謡「水無瀬川」は表記が同一ではなく、平安初期において二つに直接的な結びつきはまだないようである。

弘仁五年（八一四）ころ、嵯峨天皇は大山崎町の離宮八幡宮を中心とする地域に河陽離宮を造営している。河陽離宮は「水無瀬野や交野（文野市）への中継地であつたため、遊獵に際して休憩や宿泊に利用された」という。<sup>〔三〕</sup> 山崎にある離宮を河陽離宮と呼ぶのは、淀川北側に位置する山崎を、中国、黄河の北側にあった都市、河陽にならつたものといわれる。<sup>〔三〕</sup>

平安初期は、河陽離宮の命名に象徴されるように、あらゆる分野で中国文化の影響下にあつた。政治はもちろんのこと、宗教、美術、思想などあらゆる面で大陸文化を受容した時代であった。当然、文学の分野では漢詩文が主流となり、嵯峨、淳和天皇は漢詩集の編纂を下命している。その一つ嵯峨天皇勅命の「文華秀麗集」（八一八年）に、天皇御製（天皇が作成した和歌のこと）の「河陽十詠」がある。その中の漢詩「河陽の花」は、桃花で名高い中国の河陽を作詞の前提としているが、山崎の河陽離宮付近を詠んだものである。

### 河陽花

三春二月河陽縣。河陽從來富於花。



河陽離宮碑（大山崎町離宮八幡宮内）

花落能紅復能白。山風頻下萬條斜。

(河陽は従米、花の豊富な所である。この河陽すなわち山崎付近も同様だ。花は散り落ちる。紅色にまた白く、山の嵐がしきりに吹き下ろして数多の花の枝が斜に傾く)

漢詩はさらに「江上の船」「江辺の草」「山寺の鐘」とつづき、いずれも山崎付近の淀川周辺や山寺(相応寺)について詠んだもので、長閑な春の景色が漂う作品となっている。

### 「伊勢物語」の水無瀬

平安時代初期、水無瀬は天皇の行幸の地としてにぎわいをみせたものの、「水無瀬」を詠んだ歌は残されていない。それは九世紀初頭、公式の場では漢文、漢詩が主流であつたが、漢詩集の編纂がそれほど盛んでなかつたことに加え、私歌集などの編纂があつたとしても後世に残そうという文学的環境がなかつたことが要因のようである。



伊勢物語図色紙 第八十二段「渚の説」  
(斎宮歴史博物館蔵)

この時代、勅撰和歌集（大皇または上皇などの命により作られた歌集）は編纂されなかつたものの、貴族たちの個人的な楽しみのなかでのみ和歌は詠まっていたようだ。在原業平の和歌を中心とした歌物語『伊勢物語』の八十二、八十三段では文中に「水無瀬」が登場する。八十二段の本文を少しみてみよう。

むかし、惟喬の親王と申す親王おはしましけり。山崎のあなたに、水無瀬といふ所に宮ありけり。年ごとの桜の花ざかりには、その宮へなむおはしましける。その時、右の馬の頭なりける人を、常に率いておはしましけり。（中略）狩りはねむごろにもせで、酒をのみ飲みつゝ、やまと歌にかゝれりけり。いま狩する交野の諸の家、その院の桜ことにおもしろし。その木のもとにおりみて、枝を折りてかざしにさして、上中下みな歌よみけり。馬の頭なりける人のよめる。

世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからましとなむよみたりける。又人の歌、

散ればこそいと、桜はめでたけれうき世になにか久しかるべき

要約すると、次のようになる。山崎の向こう、水無瀬という所に離宮があり、惟喬親王（文徳天皇の第一皇子）は毎年桜のころに水無瀬の宮を訪れた。その時にはいつも「右のむまの頭なりける人」＝右馬頭の長官職に就いていた在原業平を連れていた。彼らは狩りもそこそこに済ませ、酒を酌み交わし、和歌

を作りはじめた。この父野の渚院の桜は実際に見事である。その木の下で枝をかざして惟喬親王と家臣は和歌を詠んだ。「桜がなければ、散り行く桜に心を乱されることもなく長閑に春が過ごせるだろう」と詠む業平に対し、「桜は散るからこそ美しい。この世に永遠に続くものはないのだから」と惟喬親王が歌を返した。

「伊勢物語」の各章段の幾つかには歌枕となる土地が和歌の中で詠まれている。例えば「春日」「住吉」「武藏野」「難波」「龍田川」などが舞台の段では、和歌の中にそれらが歌枕として詠みこまれているが、この段では「水無瀬」が舞台となつてはいるが、離宮のある場所として登場するにとどまり、「水無瀬」は歌枕として詠みこまれていない。

同様に八十三段も「水無瀬に通ひたまし惟喬親王」とあるが、和歌の中で詠まれていない。したがって「伊勢物語」の時代には、まだ歌枕「水無瀬」が成立していなかつたといえる。

### 平安王朝時代の和歌

惟喬親王の父、文徳天皇以後は藤原北家の摂関政治が始まる。天皇を中心とした律令政治から、天皇家と縁戚關係を結んだ藤原氏が政治の実権を握るようになつた。摂関の職は代々藤原家に受け継がれ、藤原道長の時代に全盛期を迎える。一方天皇家は摂関家の台頭によつて勢力を失い、摂関政治を隠べいするため身動きがとれないように定例行事が課された。その結果、遠方への行幸が困難になり水無瀬へ

の行幸は途絶え、河陽離宮は延喜八年（九〇八）に閉鎖された。

摂關体制は、自分たちの娘を天皇家に嫁がせ縁戚関係を結ぶことによって成立する。その体制を支える大きな役割を果たしたのが皇妃や女官たちの住む後宮であった。皇妃たちは教養のある女性たちを女房として集め、文学サロンを形成した。この後宮を中心に屏風歌や歌合が盛んになり、新たな国風文化を創出するきっかけをつくった。平安中期、国風文化興隆の機運が高まるなか、日本最初の勅撰和歌集「古今和歌集」（九〇五年）が成立した。

国風文化が花開いた平安中期から後鳥羽院の出現までの約二〇〇年間、歌語「水無瀬川」にどのような言葉の変化があつただろうか。歌群を例にあげながらその変遷を考察する。

まず初めに古今和歌集成立以前の歌を二首見ていきたい。

### 「寛平御時菊合」

うちつけにみなせはにはひまされるは

をりひとからかはなのつねかも

（水無瀬の菊の香りがえもいわれぬのは、花を折る人の香だらうか花そのものの香りであることよ）

（菊合・水無瀬川 読み人しらず）

「紀師匠曲水宴和歌」（九〇三年）

春なれば梅に桜をこきませて

ながすみなせの川のかぞする

（春になつて梅に桜をあちらこちらに混ぜ合わせて浮かべ漂よう水無瀬川は春の香りがするなあ）

（紀貫之）

最初の「寛平御時菊合」は寛平元年（八八九）ころ、宇多天皇の宮廷で催されたもので、現存する最古の菊合である。菊合とは菊花の美を競う物合（物と物をつき合わせて優劣を競う遊び。草、香、貝などがある）で、菊に和歌の短冊を添えて合わされた。「寛平御時菊合」の詞書（和歌の前書き）に、「うらてのきくは、（中略）おもしろきところのなをつけつつ、きくにはたざくにてゆひつけたり」と始まり、「やまとさきのみなせのきく」の題が与えられている。

この「みなせ」のほかに「嵯峨の大沢の池」「大阪の闘」などの名所歌が詠まれており、この文脈からここでは明らかに「やまとさきのみなせ」、すなわち「山崎の水無瀬」を指していると考えられる。この歌の作者は不明であるが、歌合に参加した作者は菅原道真、紀友則、素性法師と判明しており、二人のいざれかがこの歌の詠者と考えられる。

「紀師匠曲水宴和歌」は、三月三日の節句に催されたこともあり、春を愛する歌が詠まれるなか、紀貫之（八七二～九四五）も同じく水無瀬川の川面に散る梅や桜の花が香り立つさまを詠んでいる。川に浮か

ふ梅や桜のかわいらしい桃色が川と鮮やかなコントラストを描いており、視覚的効果を狙った歌ともいえる。

上記の二首について考えると、この時点で水無瀬は地名として認識されていたという可能性もある。貫之は『土佐日記』の中で、山崎の橋を見て「うれしきことかぎりなし」と書いており、近辺の水無瀬川を実在の地名として知っていたのではないだろうか。つまり、二つの歌は万葉集時代の「水無瀬川」とは明らかに異なる文脈で詠まれたものである。

ただし題詠(あらかじめ題を設けて詩歌・俳句をよむこと)に具体的な地名を指してはいるものの、水無瀬川の菊の美しさに触れるにとどまり情景を具体的に詠んだ歌ではない。貫之の歌にしても場所を特定できるものではないが、水の無い川や恋歌としての解釈から離れた春の景色を詠んだ歌である。これらは比較的早い時期に作られており、貫之らは残榮の河陽離宮周辺へと向かうことがあり、そこから水無瀬の景色を詠んだ歌が生まれたのかもしれない。

平安朝中期、古今和歌集成立から一〇〇年の中、「水無瀬川」が詠みこまれた歌は全部で一二首ほどにのぼつたが、先の二首を除く残りの歌は「水の無い川」を意図した歌であった。

## 歌語「水無瀬川」の変遷

『古今和歌集』（九〇五年）

事に出でていはぬばかりぞみなせ河  
したにかよひてこひしきものを

（紀友則）

（言葉に出して言わないだけなのですよ。本当は水無瀬川の水のように、人に知られぬ心の奥では、あなたのことを思いつづけているのですけれど）

みなせ河有りて行く水なくはこそ

つひにわが身をたえぬと思はめ

（読み人しらず）

（地中をたしかに流れゆく水無瀬川の水、それがもしほんとうの水など無いというのなら、ついに私も一すじの水脈のような望みも絶え、この身も捨てられたと思いましよう<sup>〔註〕</sup>）

ここでの歌は万葉集の延長線上として恋の比喩である「水無瀬川」が使われていることから、新しい展開はない。特に友則の歌は恋歌の典型的な例である。次の歌の水無瀬川を導く「ありてゆく水」、すなわち水の無い水無瀬川でさえ水が流れてゆくという言いまわしは、後の歌人たちに好まれ頻繁に用いら

れるようになった。

「堀河院百首和歌」（一一〇五年）

おもひあまり人にとはばやみなせ川

結ばぬ水に袖はぬるやと

（思いあまりあの人尋ねたい。すくつてもいない水無瀬川の水で袖がぬれるものかと）

みなせ川落ちくる水の岩ふれて

折る人なしになみぞ花さく

（水無瀬川では、流れ落ちる水が岩に触れて飛び散り、折る人もいないのに波の花が咲いている）

（川・藤原基俊）

この二首は、恋もしくは情景を詠んだ歌である。一首目は恋の歌で、万葉集時代から用いられてきた恋の比喩の延長線上にある。歌の下の句には、水無瀬川の水をすくつていないので袖がぬれているのは、涙で袖がぬれているという歌の意図が込められている。「むすぶ水」というのは、手のひらで水をすくう状態を指している。手から水はいとも簡単にこぼれ落ちることから、歌意では「はかなさ」を表わしており、また袖は涙を連想させるものとして歌に詠まれることが多い。

時代が下ると次第に歌は、従来の水無瀬川を導く「下」「ある」という語から離れて、より自由な形で川の情景や恋の状態を示す具体的な表現を用いるようになった。

「康資王母集」

深からじみなせの河の埋木は

したの恋路に年ふりぬとも

（水のほとんど無い水無瀬川の川床に沈んだ木は深く埋もれないのである。あなたを思う気持ちにた  
とえ年月が経つたとしても）

「山家集」

みなせ河をちのかよひちみづみちて

ふなわたりするさみだれのころ

（西行）

（平素はほとんど水の無い水無瀬川だけれど、五月雨のころは遠くへ通う路にも水が満ちて、舟で渡  
つてゆくことである）

例えば右の一首目、水無瀬川に続く「埋もれ木」は、川床に沈んだ木を表に出せない恋心の比喩とし

てゐる。歌枕「水無瀬」の変遷過程を論文にまとめた藤平泉氏は、「歌に日常的な言葉を用いることによつて、<sup>(1)</sup>常套的な恋の比喩表現から、より具象的な景をもつ表現へと変化してゐる」と指摘している。

### 実在の川へ

それでは、この間の水無瀬川の風景を描写した歌について、どのような変化があつたのか考えてみたい。先述の二首目の「堀河院百首和歌」の歌は、水が岩に落ちてできた水しぶきを波の花にたとえて詠んでゐる。<sup>(2)</sup>この水無瀬川は水の無い川という解釈の歌ではないが、実在の川と規定することもできない。西行の歌は、水の無い水無瀬川に五月雨が降り、淵となつた川を詠んだものである。

五月はちょうど梅雨のころにあたり、雨量がもつとも多い時期で、この季節に見られる淵とは川のもつとも深い所で、淵の対義語でもある。水の無い川が雨によって淵になるという歌はしばしば詠われており、前時代の私家集でも同様の歌が収められている。<sup>(3)</sup>確かにこの時代に詠まれた水無瀬川の歌は水の無い川として解釈できるが、実在の川を取材したかのような具象的な表現に少しずつ変化していたことが読みとれる。

### 一〇一二年ごろに出家して摂津古曾部に住んだ能因法師の歌の調書に水無瀬川が登場する。

「みなせ河のわたりにおかしき女のあるをむかへにやらん、ただにはあらじ、うたよみてやれとなれば、かういひやる」<sup>(4)</sup>とある。あたかも物語のような設定なのだが、ここで詠まれる水無瀬川は従来の水の無

い川の表現を踏まえつつ、実在の水無瀬川を舞台にしていると考えられる。

平安時代中期から後期にかけても、水無瀬川が詠みこまれた歌のほとんどが恋歌である。しかしそれに風景を詠んだ歌も現れ、その大半は水の無い川として解釈できるものの、架空の川であった水無瀬川が具象的な川へ変化していった。地名として特定できる決定的な歌は「寛平御時菊合」の歌一つのみであつたものの、水無瀬川という観念的なイメージの川が二〇〇年というスパンのなかで少しづつ土地としての具体性を帯び、地名として認識されるようになつたのではないだろうか。

〔注〕

- (4) 桥原佑介他『古代地名語源辞典』東京堂出版 昭和五六年 一二九六頁
- (5) 桜井清訳注『万葉集』旺文社文庫 昭和四九年 三九五頁
- (6) 青木生子他校注『新潮日本古典集成』萬葉集 新潮社 昭和五一年
- (7) 第一期(六一九—六七二)、第二期(六七三—七一〇)、第三期(七一一—七三三)、第四期(七三四—七五九)
- (8) 佐々木幸綱他編『日本歌語辞典』大修館書店 平成六年
- (9) 島本町史編さん委員会『島本町史本編』島本町役場 昭和五〇年 一五〇頁
- (10) 同右 一五二頁
- (11) 小島憲之校注『日本古典文学体系69 懐風集・文華秀麗集・本朝文粹』岩波書店 昭和三九年
- (12) 同右 二七六頁

(書き下し文)三番一月河陽原、河陽は從来花に富む。花は落つ雖くも紅に復能くも白し、山の蘿頬りに下ろして万葉新なり。

(13) 相應寺は難波八幡の島店前にあつたという。

(14) 渡辺実校注「新潮日本古典集成 伊勢物語」新潮社 昭和五一年

(15) 現在の大坂府枚方市。淀川を隔てて、水無瀬の対岸にある。

(16) 奥村慎哉校注「新潮日本古典集成 古今和歌集」新潮社 昭和五三年

(17) 青木賢豪他「和歌文学大系15 關河院百首和歌」明治書院 平成一四年

(18) 後藤重郎校注「新潮日本古典集成 山家集」新潮社 昭和五七年

(19) 藤平泉「歌枕水無瀬考」「神戸女子大学紀要」平成二年 三五頁

(20) をちこちにわたりかねてやかへりつるみなせかはりてふちになれば (船但)

(21) 現在の大坂府高槻市。

(22) ながらへてすまむとやするみなせ河うきせおほかるわたりとぞさく (龍因・龍因集)

## 第二章 後鳥羽院と中世和歌

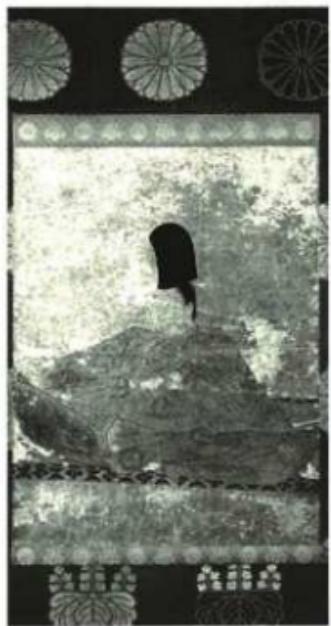
### 後鳥羽院と王朝歌人

平安中期に台頭した摂関家は、藤原道長・頼道の時代を頂点に崩壊が始まり、一世纪後半、白河上皇が院政を確立したことにより、一七〇年ぶりに天皇家が政権を取り戻した。水無瀬が再び天皇家の行幸の地となつたのは、この院政期の最後に登場する後鳥羽院が離宮を造営したことに始まる。ここに九世纪後半に途絶えていた離宮への行事が再び行なわれるようになつた。

しかし、その間に武家階級が次第に勢力を増し、平安末期の源平の合戦を経て源氏が一一九一年に鎌倉幕府を打ち立てる。後鳥羽院の院政期には、政権は関東では鎌倉幕府が握り、京都では貴族が形骸化した宫廷政治を執り行うという、二重支配状況が起つていた。武家勢力が増すなか、後鳥羽院の治世は四〇〇年にわたつて続いた貴族社会がまさに崩壊しようという時代であつた。

王朝文化、最後の大輪の花を咲かせた後鳥羽院は、奔放放縱、剛胆かつ優美、エキセントリック、当





後鳥羽天皇像  
伝藤原信実筆(水無瀬神宮蔵)

力的な活動を見せた。

特に詠歌には執心をみせ、院が下命した「新古今和歌集」は優美で洗練をきわめ、「万葉集」「古今和歌集」とともに勅撰和歌集最高峰の作品と数えられている。この時代は中世最大の歌人・藤原定家(一一六二~一二四一)を輩出するなど、不安定な政情に対し文学活動は大きな盛り上がりを見せた。彼らが作歌活動を精力的に取り組んだその背景には、和歌によって天皇家を支えていたという意識があり、和歌文化を守ることが国家の安泰につながると信じていたからである。

このころ、和歌は生活に根差した心情を詠むという余技的なものから、純文芸化が進み専門歌人が現われ、和歌の優劣を競う歌合は政治を左右する宮中の重要な行事となっていた。特に没落貴族にとって天皇が出席する歌合に参加し歌人として認められることは、立身出世のチャンスを意味した。例えば、

代きつての派手好みといわれ、まさに天衣無縫の気質を供えていた君主であったという。和歌をはじめ、管弦、囃碁、流鏑馬に狩獵など多芸に通じ、山奥にあり難行といわれる紀州熊野三山へは三回も参詣するなど、あらゆる面で精

藤原定家の家系・御子左家は、天皇・貴人が出席する公的な歌合に参加し、高い評価を得て再興を果たした一族である。宫廷政治末期を目前にして、貴族であり歌道家である彼らは、後鳥羽院とともに王朝復権を目指し、歌の道に邁進していく。そして「水無瀬」は彼らの創作の地として新しい展開をみせることになった。

### 水無瀬離宮の造営

水無瀬に離宮が造営されたのは、正治二年（一一〇〇）ころといわれ、「皆瀬御所」「広瀬御所」などと呼ばれていた。離宮は水無瀬川と淀川の右岸側の合流地点に建立され、後鳥羽院は鳥羽離宮から乗船し淀川を下り離宮へ行幸した。

水無瀬離宮の行幸にしばしば供奉した藤原定家は、自身の日記『明月記<sup>モクセキ</sup>』の中で、院が贊を尽くした離宮に家臣ならびに遊女を集め、花見、紅葉狩りに囲碁や将棋、歌舞に乗馬と遊びに明け暮れていたと記している。では贊を尽くした離宮とは、どのようなものだったのだろうか。

【増鏡】の「おどろのした」には豪奢な離宮



後鳥羽離宮碑

を、次のように叙述している。

「鳥羽殿・白河殿なども修理させ給ひて、常に渡り住ませ給へど、猶また水無瀬といふ所に、えもいはずおもしろき院づくりして、しばしば通ひおはしましつつ、春秋の花紅葉につけても、御心ゆく限り世を響かして、遊びをのみぞし給ふ。所がらも、はるばると川にのぞめる眺望、いとおもしろくなん。(中略)かやぶきの廊・渡殿など、はるばると艶にをかしうせさせ給へり。御前の山より滝おとされて、石のたたずまひ、苔深き深山木に枝さしかはしたる庭の小松も、げに千世を籠めたる霞の洞なり。(後略)」

(水無瀬という所になんともいえない優雅風流な御所を造営なさつて、しばしばお通いになつては、春の花、秋の紅葉につけて、世の評判になるほど、詩歌管弦の遊びをばかりなさる。場所がらも、はるばると川にのぞんでいる眺めがほんとうに趣深い。萱葺の廊・渡殿など、はるかに遠くまで優美に趣向をこらしてお造りになった。御前の山から滝を落とされて、その石のようすや、苔が深く生えている老木に、枝をさしかわしている庭の小松なども、まことに千年もの御繁栄を包み込んだ院の御所である)

【明月記】によれば、離宮は水無瀬川を廻つた眺めの良いところに建立され、山上に池があり、池の上

に滝を構え、川をふさいで山を掘り水を引くといった贅沢この上ない造営であったという。後鳥羽院は正治元年、一九の歳に順徳皇子に譲位する。上皇となつたころから和歌に開眼し次々と歌合、歌会を開いていく。表②は後鳥羽院の水無瀬への行幸と和歌に関する出来事をまとめたものである。「明月記」の記述からでも水無瀬への行幸は三〇回以上に及び、とくに建仁年間の行幸の多さには目を見張るものがある。ここでは水無瀬で催された主要な歌合を紹介する。

### 水無瀬釣殿当座六首歌合

建仁二年（一二〇二）六月三日に催された水無瀬釣殿当座六首歌合は、水無瀬での最初の歌合である。この歌合は、定家と親定こと後鳥羽院の二人だけで行われた。<sup>（註）</sup>当座歌合とは本来、即題で歌合をするという即興的なものであるが、後鳥羽院は後日歌を詠進（詩歌を作つて宮中、神社に献上・奉納すること）している。この歌合の本来の目的は、定家の才能を高く評価した後鳥羽院が定家に歌を習うといった趣向のものであつたと考えられる。親定という名前も定家に対する親愛のあらわれとみるとよい。

ここで、後鳥羽院の和歌指導にあつた藤原定家とはどのような歌人であつたのか少し触れておきたい。

年号	西暦	月	出来事
正治2年	1200		水無瀬離宮造営
建仁元年	1201	3月	水無瀬離宮に行幸
		10月	熊野行幸。帰途、水無瀬離宮に一泊
建仁2年	1202	4月	水無瀬離宮に行幸
		5月	水無瀬離宮に行幸
		6月	水無瀬殿当座六首歌合
		7月	水無瀬離宮に行幸
		9月	水無瀬離宮に行幸 水無瀬殿恋十五首歌合 若宮撰歌合 水無瀬桜宮十五番歌合
建仁3年	1203	5月	水無瀬離宮に行幸
元久2年	1205	6月	元久詩歌合
承元元年	1207	4月	最勝四天皇院障子画の名所選定
		6月	最勝四天皇院障子和歌
健保元年	1213	12月	水無瀬殿当座御会
健保2年	1214	8月	水無瀬離宮に行幸 水無瀬馬場殿院撰歌合
健保4年	1216		洪水により離宮一部流失 新御所を山手(百山付近)に造営
承久元年	1219	3月	水無瀬殿御歌会
承久3年	1221	5月	承久の乱
		7月	後鳥羽院隠岐に流される
嘉禎2年	1236	7月	遠島御歌合
延応元年	1239	3月	後鳥羽院、隠岐で死去

表② 後鳥羽院の水無瀬への行幸と和歌に関する出来事

すみわたる月かけ清みみなせ川

むすばぬ水を氷りとぞみる

(河月似水・建仁元年八月十五夜撰歌合・定家)

水無瀬川に清らかな月光が光つてそれが氷にみえる、という繊細で幻想的なこの歌は定家の歌風として特徴的なものである。定家は美しい言葉の響きや表現を追究し、和歌において唯美的世界を構築しようとした。定家の歌論の柱となつたのは本歌取りという技巧である。定家の言葉に「詞は古きを慕ひ、心は新しきを求めよ」とある。本歌取りとは、有名な古い歌を下敷きにして、その本歌の趣きを活かしながら、新しい歌境を創り出す技法である。元の歌と新しい歌、この二つの歌の世界が重なることによつて、余情をいっそう深める効果が期待できる。上記の歌は前掲した「おもひあまり人にとはばやみなせ川むすばぬ水に袖はぬるやと」を踏まえたものと考えられる。

定家はこの「むすばぬ水」という表現を水の無い状態として捉え、水無瀬川の歌に用いた。古歌を重んじながらも、前衛的かつ実験的な歌作りを目指した定家の歌は、この時代の歌人に大きな影響を与えたのである。

## 水無瀬殿恋十五首歌合

建仁二年(一一〇二)九月一三日夜の水無瀬殿恋十五首歌合は、後鳥羽院が水無瀬離宮で主催した歌合のなかで、最も盛大な会であつた。「明月記」によると、八月二九日に歌の題が与えられ、当日の夜水無瀬殿で披講(詩歌など)の会で詩歌を読みあげること)された。歌の勝負の判者は、定家の父であり後鳥羽院の歌の師といわれる俊成が務め、規定こと後鳥羽院と、「新古今和歌集」の代表歌人たちで、ある前大僧正(慈円)、左大臣良経、權中納言公継、俊成、卿女、女房宮内卿、大藏卿有家、左少将定家、上総介家隆、左少将雅経が歌合に参加し、一五〇首が詠まれた。この歌合からは一五首が「新古今和歌集」に入集している(卷末付録参照)。題目は次のとおり。

春恋 夏恋 秋恋 冬恋 晓恋

暮恋 翠中恋 山家恋 故郷恋 旅泊恋

閨道恋 海辺恋 川辺恋 寄雨恋 寄風恋

ここでの歌の題は、恋とその背景となる状況、の二つから成っている。歌合は主題に基づいた内容の



天德内裏歌合図(京都文化博物館蔵)

天徳4年(960)村上天皇が清涼殿において催した歌合。本文とは直接関係ないが歌合の様子がよく分かる。

歌を詠進する必要がある。よって今回の恋歌合で、地名「水無瀬川」を詠むことは恋の歌題から外れることになる。歌題に沿うと考えられるのは「川辺恋」のみである。唯一俊成卿女が歌中に「水無瀬川」を詠んではいるが、残り九歌は他川について詠んでいる。<sup>(註)</sup>

ここで俊成卿女の歌も従来の恋の比喩で意味が通り、「水無瀬川」を地名として特定する必要はない。というものの俊成卿女は、主催地を考慮に入れてあえて歌語「水無瀬川」を選んだのかもしれない。彼女は定家の父、俊成の娘で才氣溢れる女性であつたという。

### 歌枕「水無瀬川」

「明月記」によると、歌合当日、その場で題が与えられる当座歌合とともに隠題の歌会が催された。隠題とは、技巧として題をさりげなく詠みいれることである。当座の題は「月前秋ノ嵐」「水路ノ秋月」「曉月ニ鹿ノ声」といった中秋の名月に相応しい内容である。そして隠題は「水無瀬川」が選ばれた。

### 歌枕「みなせかは」

なみを・みなせかはぞ月のしばしすむ

清たき川のはやき流れは

(後鳥羽院御集・後鳥羽院)

(清滝川の早い流れの波をすべてせき止めたならば、疊に隠れていた月が冴えざえと光り輝いてい

る)

山のはに雲をあつめてこよひみな

せかばやつきのいりやらぬまで

(山の稜線に雲を集めてすべてせき止めたならば、今宵の月が隠れてしまわないのに)

(明日香井和歌集・飛鳥井雅経)

藤原定家は「明月記」に「九月一三日、月清明ナリ」と記した。後鳥羽院と歌人たちは水無瀬離宮から、山の端を覆う雲から現われた清明と輝く月とともに眺めたに違いない。恋十五首歌合で事前に準備された歌は記録されたが、当日詠まれた歌はほとんどが散逸し、この二首だけが私歌集に載せられている。全首残されていたら、当時の歌人たちがみた「水無瀬」の様相がより鮮明になつたに違いない。

ただ、ここでいえるのは彼らが水無瀬の地でその地名の歌を詠んだことは、歌語「水無瀬川」の変遷過程において画期的な出来事であったということである。すなわち当日出席した歌人たちは、歌枕「水無瀬川」の誕生に立ち会つたことになる。

水無瀬殿恋十五首歌合から一〇日ほど隔てて若宮撰歌合(九月二六日)、次いで水無瀬桜宮十五番歌合(九月二九日)が行われた。「国歌大觀」によれば、若宮撰歌合は若宮(春日若宮か石清水若宮か不明)に奉納された和歌で、先述の水無瀬恋十五首歌合から秀れた歌を三〇首撰歌したものである。同様に水無瀬

桜宮十五番歌合も恋歌合から二〇首撰歌したものである。この歌合は後鳥羽院が水無瀬滞在中、桜宮に奉納するため撰歌したものといわれている。

### 名所「水無瀬」の誕生

歌枕「水無瀬」は水無瀬殿恋十五首歌合に参加した歌人たちによく認識されるようにみえた。しかし、多芸であった後鳥羽院はそれだけに移り気で、和歌に対する興味は次第に薄れ、以降水無瀬で大きな歌会は催されなかつた。再び作歌への意欲をもつようになったのは、院下命の「新古今集」編纂に自ら携つた事と元久<sup>（げんくう）</sup>二年（一一〇五）六月一五日の元久詩歌合の開催であつた。

見渡せば山もとかすむ水無瀬川

夕べは秋と何思ひけん

（水郷春望・元久詩歌合）

この歌は水無瀬殿恋十五首歌合の隠題で詠られた「水無瀬川」と同じく、実体験をもとに水無瀬離宮から春の夕景色を眺めた歌である。藤平泉氏は、この歌がそれまでの「水無瀬川」の表現とはまったく異質のものであり、「この山のふもとの霞む水無瀬川の春望は、後鳥羽院の見た実体験がその表現の根幹であり、伝統的な歌枕としての「水無瀬川」の表現からは一切隔絶している」と指摘している。

従来、歌謡「水無瀬川」は「下」を導く枕詞として恋の比喩に用いられてきたのが、後鳥羽院の実体験にもとづいた歌によって新たな意味が生成されたのである。しかしながら藤平泉氏によると、この「水無瀬川」の表現は後鳥羽院のみに許される表現であったという。さらに「見渡せば……」の初句に古代の天皇の国見歌（支配者が国土を賛美する歌）のような帝王としての後鳥羽院の姿を見る説もあり、水無瀬は天皇を象徴する特別な場所として捉えられるようになつたのではないかと推測する。<sup>(註)</sup>

「見渡せば……」のフレーズを好んで多くの歌に用いた後鳥羽院の水無瀬歌は、一見のどかな春をのぞんだ歌のようであるが、それはまさしく君主の歌であつた。

### 障子画に描かれた水無瀬

承久元年（一一〇七）、後鳥羽院下命の最勝四天王院の落成を祝して法要が行われた。この最勝四天王院は、京都三条白川にある僧慈円の坊舎の敷地を献上させて、元久元年（一一〇五）着工が始まった。その際、院内の障子に名所を描くことで定家をはじめ歌人たちによって日本各地の名所の選定が協議された。最終的に名所は四六カ所に決められ、その一つに水無瀬が障子画に描かれることになった。院内の中心部には吉野など代表的な名所を、南には難波以下攝津国、東方には陸奥、さらに常の御所には院の親しんだ土地として山城国が選ばれ、御寝所の傍に鳥羽、伏見、西側の障子には水無瀬、交野などの名所が配置された。障子絵は中央から地方へと実在の地理を考慮に入れて配置され、また季節の

移り変わりも描かれるなど、趣向を凝らしたものであったという。

承久元年の六月には、障子絵四六カ所の名所を題に、後鳥羽院歌壇の代表歌人一〇名が歌を詠進した。

### 水無瀬川

水無瀬山木葉あらはに成るままに尾上の鐘声ぞ近づく

(後鳥羽院)

水無瀬川木葉さやけき秋風に鹿の音あらふ菊の下水

(慈円)

落滝つ菊の下水水無瀬川流れをくめる万代の秋

(源通光)

万代の秋まで君ぞ水無瀬川かけすみそめし宿のしら菊

(俊成卿女)

万代の契ぞむすぶ水無瀬川せきいるる庭のきくの下水

(藤原有家)

この里に老いせぬちよを水無瀬川せきいるる庭のきくの下水

(定家)

山風のよそにもみぢは水無瀬川せきいるる宿の庭のしら菊

(家隆)

庭にうづむ山路の菊を水無瀬川ぬれて吹きほす千世の松風

(雅経)

波風につけても千世をみなせ河嶺の松蔭菊のした水

(源具親)

(藤原秀能)

歌群を一覧すると、従来の恋歌や後鳥羽院が詠んだ名所歌「見渡せば……」の延長線上では詠むこと

ができず、新しい「水無瀬川」を詠んだ歌であることに気づく。ほとんどの歌には「万代」や「千代」などの「永続、永遠」を表わす言葉と「菊」の語句が用いられている。そして、どの歌も言葉の使い方は各々であるが、内容的には同じことを詠っているようである。

なかでも特徴的な「菊の下水」という言葉についてみていただきたい。「菊の下水」とは菊花の下に流れる水のこと、中国の故事によれば、これを飲むと長寿を保つとされた。また、菊はその高潔な美しさが君子にたとえられ、ここでは後鳥羽院を指している。よってこの名所歌は、後鳥羽院の御代はこの先永遠である、という内容を意味している。

この歌群のなかで、一首だけ例外がある。それは、後鳥羽院の歌である。「見渡せば……」と同じように、率直に水無瀬の情景を詠んでいる。

水無瀬山木葉あらはに成るままで

尾上の鐘声ぞ近づく

(水無瀬山に木葉が舞い落ちるにつれて(妨げるものがなくなつて)、山の上の寺の鐘が近くに聞こえてくる)

家臣の「水無瀬」歌が具体的な風景をほとんど詠んでいないのに対し、後鳥羽院の歌は、晚秋の葉が

落ちてもの寂しい風景に對して鐘が鳴り響く光景を印象的に捉えている。

### 後鳥羽院歌壇の水無瀬

後鳥羽院歌壇にとつて水無瀬とは何を意味したのだろうか。彼らは贅沢の限りを尽くして建立された水無瀬離宮に集まり、後鳥羽院の氣まぐれともいえる遊びに供奉した。そこは和歌を詠むこともあれば、白拍子を召して踊つたり船遊びをした所だった。水無瀬は彼らにとつて名所というより後鳥羽治世を最も象徴する場所として提えていたといえよう。新しく生成された歌枕「水無瀬」は後鳥羽院にとつて山水の景勝をたたえた名所であったが、家臣たちにとつて歌枕「水無瀬」は後鳥羽院の治世を仰ぎたたえることを意味していたのである。

次に注目したいのは、歌枕「水無瀬」が生成されたことによつて、新たな歌枕が生まれているということである。障子絵和歌で後鳥羽院が詠んだ歌の中に水無瀬山が登場する。従来の枕詞「水無瀬川」では川の意味が切り離されると意味が成立たない



水無瀬の滝

くなり、それはあり得ないことがあつた。しかし名所として選定されたことによって地名に付隨した風物が詠みこまれ、「水無瀬山」「滝」「里」がこの時代から用いられるようになつた。

### 春の水無瀬を詠む

障子絵和歌に引き続き水無瀬が名所題として選定されたのは、後鳥羽院の第二皇子である順徳院（一一九七—一二四二）が下命した建保三年（一二一五）「建保名所百首歌合」である。「新古今集」成立以降、和歌への情熱を失つた後鳥羽院に変わって、若き順徳院が歌作に熱中するようになつた。ただし後鳥羽院のような牽引力はなく、院の監視の下で定家、家隆が指導にまわつて歌会が頻繁に開かれた。

### 攝津 水無瀬

ことにいでいはぬ色とやみなせ河かはらじ春の山吹の花

花とのみながるる水をみなせ河袖つく波にをりやかねなん

春の色をいく万代かみなせ河霞のほらの苔のみどりに

水無瀬河花とも水の白波に霞ながるる春の曙

（順徳院）

（行意）

（定家）

（藤原家衡）

（俊成卿女）

（兵衛内侍）

水無瀬河ありて行水青柳のうつろふかけは波ぞかずそふ

すまむ世のながれも遠しみなせ河君がみかけの春のよの月

水無瀬河そここの玉もは青柳の波にしたがふしづえなりけり

水無瀬河ちらぬ梢のうつるより桜の波のたたぬ日はなし

水無瀬河波もしづかに立つ霞にごらぬ御代の末ぞはれゆく

ちる花はうつりにけりなみなせ河山には春の色もなきまで

(家隆)

(中山忠定)

(藤原知家)

(藤原範宗)

(藤原行能)

(藤原康光)

先述の最勝四天王院に詠進された和歌と見比べると、二つの歌合の内容には大きな隔たりがある。順徳院主催の名所和歌では、後鳥羽院を象徴する内容はさほど見あたらず、水無瀬の春を愛でた歌が並んでいる。なかでも順徳院は山吹の花を題材に春の水無瀬を詠んでいる。山吹は春の歌にしばしば用いられる花であるが、島本町の町花でもある。まさに島本の春を象徴する歌といえよう。以下家臣の歌は、後鳥羽院の「見渡せば……」に影響された感もあるが、霞たなびくのどかな水無瀬川の春を詠んだ歌がそろっている。

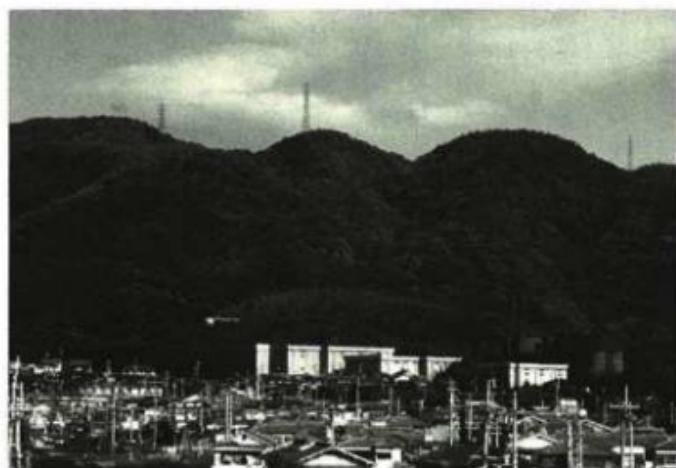
このなかで定家は霞という表現に含みをもたせ、「霞のほら」という句を使用している。「霞のほら」とは仙人のすみか、ひいては仙洞御所(譲位した天皇が住むところ)を示すと思われる。「霞のほら」を詠みこむことで朝廷の繁栄を願ったのである。定家以外にも後成卿女、行能は歌に天皇ことを示す「御代」

などのフレーズを詠んでおり、同様に朝廷を寿ぐ歌を詠進しているといえよう。

しかしながら、この歌会に参加したすべての歌人  
がこのような歌を詠んでいるともいえない。水無瀬  
川の春を題詠として詠んだ景歌は、典型的な名所歌  
といえるだろう。定家がこのような順徳院をたたえ  
る歌を詠んだのは、一人がこのころ非常に近しい関  
係にあつたと考えられる。

次の歌はすでに後鳥羽院から離れて順徳院に忠誠  
を尽くした定家を物語るものである。後鳥羽院とと  
もに水無瀬山の別荘に居た定家が、梅の花を衣装箱  
に入れ、これを民部卿の桑頼弘にもたせて京の御所  
の順徳院に献じたときに一首詠む。

水無瀬山ほどは雲井に遠けれど  
匂ひばかりは君がまにまに



水無瀬山

(紫禁和歌集・定家)

(水無瀬山は九重の雲居から遠く隔たつておりますが、この梅の花の匂いだけでもわが君の御心のままに御嘉納くださいませ)

みなせ山程は雲るの春ながら

千代のかざしの色ぞうれしき

(本当に水無瀬山の春はここ九重の雲居からは遠いけれど、こうしてそこの梅の花を千代のかざしとすることができるのはうれしい)

### 承久の乱

承久三年(一一二二)、後鳥羽院は公家勢力を再興させるため幕府討伐に兵を挙げた。承久の乱である。

三代将軍源実朝の暗殺によつて動乱した鎌倉幕府を倒せると見込んでの出兵だった。しかし院の目論みは大きく外れ、大挙して上洛した幕府軍に大敗した。その結果、後鳥羽院は隠岐に流され、朝廷と幕府の二重支配はこの戦乱によつて終わった。

たち籠る閑とはなきで水無瀬河

露猶晴ぬ行末のそら

(あたり一面にたちこめてはいるが、私を引きとどめる閑にならない水無瀬の川霧よ。その川霧が晴れないように私も行く末が案じられ、いつこうに気がはれません<sup>(1)</sup>)

この歌は龍岐への道中、水無瀬離宮を通ったとき院が詠んだものであると「承久記」は記している。霧で先が遮られた様子を自身の行く末にたとえ、後鳥羽院の不安な心情が表わされている。

失意に苛まれたのは後鳥羽院だけではない。院の遠流は宫廷社会の終焉を意味し、貴族の身辺にも大きな影響があつたことは想像に難くない。次に挙げるは承久の乱以後、後鳥羽院歌壇が詠んだ「水無瀬」歌である。

水無瀬山せきいれし滝の秋の月

思ひいづるも涙落ちけり

(水無瀬山から水を堰きいた滝に秋の月、思い出すも涙が流れ落ちることよ)

(壬二集・家隆)

水無瀬山昔の春の色ながら

我みぞ今は花のよそなる

(人家和歌集・後鳥羽院二条)

(水無瀬山の春の景色は昔のままであるけれど、もっとも私の身は華やかなりしあのころとは遠い所

にあるのです)

みなせ川あはれむかしとおもふより

涙のふちをわたりかねつつ

(後鳥羽院の時代を偲び思うあまり水の無い水無瀬川にできた涙の淵を渡ることができないのです)

見ればまづ涙ながるみなせ河

いつより月のひとりすむらん

(水無瀬川を見ればまず涙を流さずにはいられない、いつよりか月がひとりくつきりと冴え渡つて  
いることだろう)

(続千載和歌集・西音法師)

これらの歌を一見すると、涙などの言葉から歌枕が成立する以前の水無瀬歌のようであるが、そうではない。彼らはみな遠流の身となつた後鳥羽院を偲び、院のいた華やかであった時代を回想した歌を詠んでゐるのである。いずれも没落していくわが身を後鳥羽院、そして主人を失つた水無瀬離宮に重ね合わせていることが伝わる。

ここでの水無瀬を藤平泉氏は「これらの歌における『水無瀬川(山)』は、もはや歌枕として機能して

おらず、後鳥羽院を象徴し、かつてそこで行われた華やかな時代を回想するための特殊なキーワードとなつてゐる」と指摘する。<sup>(四)</sup>

承久の乱以降、最も「水無瀬」を詠んだのは、院に忠実に仕え寵愛を受けていた家隆である。後鳥羽院が自ら師と仰いだ定家は、一句も詠んでいない。定家の歌道家としての自負がしばしば強い性格の後鳥羽院の逆鱗に触れ、彼らは次第に強く反目しあうようになつて行った。この章の最後に後鳥羽院の歌を一つ。

軒端荒れてたれかみなせの宿の月

住みこしままの色は変らず

(軒端も荒れて、水無瀬離宮に射す月をいつたい誰が見よう。住んで来たままの澄んだ光は変わらないで)

嘉祐二年(一二三六)、家隆とともに催した「遠島御歌合」の中の一首である。この歌合は後鳥羽院への忠誠心を失つていない臣下や院の婚戚関係の歌人が京都から歌を寄せた。新古今風の技巧を捨て、都への鄉愁、失意をストレートに詠つた歌は悲痛に満ち、大衣無縫と呼ばれた君主の栄光と転落の差は図りしれない。

後鳥羽院の激しい気性は家臣を疲弊させ、放蕩の限りを尽くした行幸は国税に喘ぐ民衆を苦しめたことであろう。國家の現状を見誤り、優れた統治者とはいえないかった。しかし宮廷政治末期の文化を主導し、最後に大輪の花を咲かせた功績は少なくはなかつた。丸谷才一氏によれば、彼は定家の才能を遥かに凌ぐ歌人であった、という。

「水無瀬川」、忍ぶ恋心を表現するのに用いられたこの歌語が、後鳥羽院の行幸によってほんの数年間にさまざまな展開をみせた。後鳥羽院は水無瀬を名所として、院に仕えた歌人たちには水無瀬離宮を院の御代をたたえる場所として捉えた。しかし、それもまもなく承久の乱という歴史の因果によって、宮廷は存続の危機を迎へ、後鳥羽院歌壇は水無瀬を宮廷文化を回想するキーワードとして再定義したのである。

ここで、ようやく歌枕「水無瀬川」は固定されたイメージをもつことになる。この章では歌枕「水無瀬」の誕生から生成まで見てきた。こうして水無瀬は後鳥羽院の離宮があつた名所のみならず、栄華の跡という歴史的情緒が加わったことによって、後世の人々の心情を引きつけていく。次章では戦乱の時代といわれる鎌倉、室町時代にかけて、歌枕「水無瀬」が人々にどのように詠み継がれていくかを取り上げていく。

(注)

- (23) 藤原定家の日記。一八〇〇年ごろから一二四一年まで執筆。堀田善衛「定家明月記私抄」新潮社 昭和六一年
- (24) 後鳥羽天皇から後醍醐天皇までの一五三年間の歴史を叙述した歴史物語。「おどろのしは」は第一章で、おどろとは草木が乱生していること。御製「奥山のおどろの下を踏み分けて道ある世ぞ人にしらせん」からの題名。
- (25) 井上宗雄全訳注「増鏡(上)」講談社学術文庫 昭和五四年
- (26) 「明月記」の記録によると、建仁二年の六月三日の水無瀬行幸の時、定家は院より六首の題を賜る。定家はすぐ歌を詠達したが、院は五日に同題の六首を詠んで定家に一覧させている。その後、院は帰京後の五一日、自ら判じた歌合の勝敗を定家にみせている。
- (27) 旅のこと。
- (28) ながれての契をよそにみなせ川かげはなれゆく水のしら波 (川辺恋・俊成御女)
- (29) 蕎平泉「歌枕水無瀬考」前掲 三七頁
- (30) 横田善衛「定家明月記私抄」前掲 三六四—三六五頁
- (31) 承久元年(一二二九)内裏百番歌合二月三日
- (32) 松林靖明校注「新撰日本古典文庫 承久記」現代思潮社 昭和四九年 一三六頁
- 藤平泉「歌枕水無瀬考」前掲 三九頁

### 第三章 泰平への祈り



御影堂(現 水無瀬神宮拝殿)

#### 御影堂の建立

延応元年（一二三九）二月二一日、後鳥羽院は遠島の隱岐で京都に戻れないまま六〇年の生涯を閉じた。隱岐に流され過ごした一九年間もの年月は、華やかな京都への郷愁と憤りの連続であつただろう。後鳥羽院と同じく都に戻るという願いかなわず遠流の身となつた土御門天皇、順徳天皇の靈を弔うため、旧水無瀬殿の地に御影堂が建てられた。

この土地は院の勅命によつて藤原信成・親成親子が譲り受け守り続けていた。彼らは院が隱岐から送つたという「御手印置文」と、修明門院（後鳥羽院後宮）から寄進された直衣・法衣姿





後鳥羽院法体像(水無瀬神宮藏)



後鳥羽上皇御手印蓋文 国宝(水無瀬神宮藏)

の両肖像画を御影堂に安置し祀った。

この御影堂が建てられた前後に、後鳥羽院のたたりのうわさが広まる。後堀河天皇、仲恭天皇、北条時房、北条泰時らが相次いで命を落としたのは院の怨靈がたたつたからだというのである。御影堂が院の怨靈を鎮めるために建てられたかどうか真偽のほどは定かではないが、鎌倉末期から南北朝時代になつても不幸があるにつけて繰り返しうわざされたために、所領の保護や寄進が行われるようになつた。それは水無瀬が交通・政治的要地であつたことと無関係ではないようである。第三章では後鳥羽院が祀られた水無瀬御影堂が舞台の中心地となつて展開していく。

### 「水無瀬三吟百韻」

鎌倉時代から室町時代にかけて相次ぐ戦乱・飢饉に、人々は現世の不安や苦しみから逃れるため神仏にすがろうとした。歌の形式も変化し法楽和歌が流行した。「和歌辞典」によると、法楽和歌とは「わが国」の神明神は和歌を賞美するとの信仰にもとづき、これに歌を奉納し、もつてその加護を祈念しようとして詠んだ和歌」という。室町後期ころをピークに和歌のみならず連歌までがその流行をみせるようになった。

この時期に活躍したのは堺考や堺惠、正徹、宗祇などの宮廷出身ではない連歌師である。連歌とは、数人の作者が同座し、順に長句(五七五)、短句(七七)を交互につけあつて百句に及ぶ共同詠作の文芸で、

ある。和歌のように一首で完結するものとは異なり、前句によつて呼び起されたイメージを次々と発展させていく。他者を介在させることによつて歌に新鮮な驚きをもたらすと同時に、句をつなぐ一瞬の間を楽しむというものである。

長享二年（一四八八）正月二二日、宗祇、肖柏、宗長は、歌道の大先達・後鳥羽院を追慕して法樂連歌「水無瀬三吟百韻」を水無瀬廟に奉納した。「水無瀬三吟百韻」は連歌の金字塔ともいわれ、連歌の傑作として古くから手本とされている。この日は後鳥羽院崩御から数えて一五〇年目の月忌（月違いの命日、崩御は二月）に当たり、追悼の儀として連歌が奉納された。

発句（第一句）は「新古今和歌集」に入集した後鳥羽院の名歌「見渡せば山もとかすむ水無瀬川夕べは秋と何思ひけん」を本歌として、基本的に眼前の風景とその季節を詠まなければならぬ。宗祇は発句に「雪ながら山もと霞む夕べかな」（この水無瀬の離宮跡に立つてはるかに見渡すと、かなたの嶺にはまだ雪をいただきながら山麓一帯はぼうっと霞んで、まことに趣深い春の夕暮れであることよ）と詠んだ。初めの八句と最後の句をかかげておこう。（巻末付録参照）

雪ながら山もと霞む夕べかな

宗祇

行く水遠く梅にほふ里

肖柏

河風に一むら柳春見えて

宗長

船さすおともしるきあけがた

月やなほきり渡る夜に残るらん

霜おく野はら秋は暮れけり

鳴くむしの心ともなく草かれて

かきねをとへあらはなる道

\*

人におしなべ道は正しき

柏 祇 長 柏 祇 長

長

発句に早春の夕暮れの趣きを詠み、二句目は雪が溶け川へと流れ、里には梅の香りが漂い、そして河畔には柳が風に揺れ春が訪れる。ここまでが春の句で、次の句は静かな明け方に川舟の棹さす音が静寂を破る。川は明け方なのにほんのり明るいのは川霧に月がまだ残っているからだろうか。野原には霜が張り、秋が終わろうとしている、鳴いていた虫の声も微かで、草木が枯れて垣根ばかりが目立つ。そこに道が一筋続いている。春の歌から秋、そして冬へと歌が詠み続けられ一〇〇句目で終了する。

最後の句は、後鳥羽院御製「奥山のおどろの下をふみ分けて道あるよとぞ人にしらせん」を踏まえて詠んでいる。「おどろの下」とは木の生え茂った道のことをいい、道もないような奥山を踏み分けて入り、どのような山の中にも道はあると知らせたいという。<sup>(註)</sup>この歌は院が理想とした天皇親政の道の在り方に

ついて詠つたものである。

水無瀬の移り変わりゆく季節を二人の連歌師が繊細かつ叙情的に詠いあげている。そのなかで最後の句は暗示的である。戦乱の世を憂いた戒めだろうか、それとも祈りだろうか。貴族文化に彩られた地は宫廷の限られた人たちだけの名所ではなくなる。僧侶である彼らも、時代を経ても変わらない水無瀬の風景を見、後鳥羽院への追悼と懐古が入り交じつた思いを共有したのだろうか。

### 水無瀬殿御法楽

宗祇たちが「水無瀬三吟百韻」を奉納したその年、朝廷もまた御法楽の儀をかねてより進めていた。この水無瀬への法楽行事はいつごろからはじまつたのだろうか。「国歌大觀」の中で最も古い法楽の記録が、三条西実隆の「雪玉集」所収の「文明九年（一四七七）水無瀬殿御法楽」の歌である。ついで姉小路基綱の「車懐集」には祠書に「文明一二年（一四八〇）水無瀬御廟に奉りし百首」とあり、その一部が載せられている。このことから水無瀬殿御法楽が朝儀として催されるようになったのは一四八〇年前後で、後土御門天皇の在位中からと思われる。

一四六七年から十一年にわたって争われた応仁の乱は京都の大半を焼きつくし、和歌所も消失の運命をたどった。そのため、朝廷は宮廷文化復興にむけて、気概をもつて朝儀の一つに御法楽を取り入れたようみえる。それからほぼ毎年、後鳥羽院命日の一二日（月は必ずしも二月ではなかった）に水無瀬殿

御法楽が催されるようになつた。

明応三年(一四九四)、後土御門天皇は天下泰平を願い、隱岐より上皇の神靈を迎えて「水無瀬宮」の神号を奉じ御影堂は水無瀬宮となつた。<sup>翌年</sup>の明応四年(一四五五)一月二日の御法楽は、後土御門天皇、勝仁親王、蓮空、三条西実隆、宋世ら一〇名が水無瀬宮へ一〇〇首奉じ、比較的盛大な歌会が催されたようである。

しかし、室町末期から再び戦国時代へと突入し政情の不安定さを反映してか、水無瀬殿法楽はほとんど行われなかつた。天正一〇年代(一五九〇年代)になると秀吉の天下統一が軌道にのり、京都は比較的安定した状況になり、後陽成天皇の在位から再び歌道は活況を呈す。

このように始まつた水無瀬殿御法楽は江戸時代に入つて定着し、毎年、後鳥羽院命日の一月二二日に御法楽が行われた。一七八〇年代までは、後鳥羽院の月忌として毎月二二日に御法楽を開く歌道に熱心な天皇も少なくなかつた。なかでも院没後の五〇年、一〇〇年毎の節目に行う水無瀬宮御法楽は特別な朝儀として、後鳥羽院崩御七〇〇年を追悼した昭和一四年(一九三九)まで続けられた。

### 文学の神・後鳥羽院

それでは、水無瀬殿御法楽とはどういう行事であったのか。後水尾院が後光明天皇のためにまとめた「当事年中行事」([皇室御撰集])一月二二日の条にその詳細が書かれている。その一部を抜粋する。

「水無瀬宮の御法楽あり、一夜神事也。後行水の後、月のさはりの人御所にまゐらず。局に候する也。兼日あるいは御当座と着宣による。但大概は兼日也。四五日以前題をくばらる。其様後会始に同じ。正月十九日に見えたり。短尺は小高壇一枚をたてざまに二つに折りて包みて、上下のあまりを紙押折り柳笪にすゑて、水引にて結て札をつく、水無瀬殿御法楽来る廿二日此定也。當口おのの詠進の短尺をとり集め、次第にかさねて硯の蓋にすゑて常の御所の御座にく。御行水まゐりて先毎朝の御拝あり、次は御拝の御直衣ながら、かの御座に着御、水無瀬宮のかたに向かはせ給ひてよみあげさせ給ふ。  
〔註〕  
微音外へ聞えざるほどなり。」

水無瀬宮御法楽は、一夜神事であり水を浴びて身を清める祭事である。御当座とは即題のことと、そ



水無瀬神宮(客殿)

の場で題を示し歌を求めることがある。大体は、四、五日以前に題を配られるという。また、御法楽は宮中において行われ、水無瀬宮の方向へ向って微音でよみあげられるというのである。<sup>(三)</sup> 後鳥羽院時代の水無瀬殿歌合とは異なり、彼らは宫廷で詠んだ歌を水無瀬宮へ後日奉納した。

水無瀬宮御法楽を天皇が定期的に行う意味を古相正美氏は「水無瀬宮に祀られる後鳥羽天皇には、和歌を好み新古今和歌集への執筆に代表される文学者としての面と、隠岐に流されそのまま崩御してしまった御靈的な面とがある。(中略)つまり水無瀬宮への法楽は、文学の神として行うのか、靈を鎮め慰めるべき対象として行うのかという二つの可能性を有している」と分析する。<sup>(四)</sup>

天皇家は御法楽という朝儀を主に水無瀬宮と北野天満宮で行なっていた。北野天満宮といえば、学問の神菅原道真を祀った場所として名高い。しかし元々天満宮は、大宰府へ左遷された道真が怨靈となつて災いをもたらすのを怖れた都の人々が、その靈を鎮めるために建てたものである。水無瀬宮もまた、和歌の名手であり、隠岐へ流され無念の死を遂げた後鳥羽院を祀った社として、北野天満宮と同じ性格を有している。そのため法楽は、怨靈を鎮めるためと學問及び和歌の振興を祈念するという両義的即面があつたといえる。

法樂和歌は、僧侶をはじめ天皇たちが歌を通じて國家鎮護を祈念したが、戦乱の時代から泰平の世を迎えると宫廷の繁栄と和歌の上達を祈念する朝廷行事へと発展した。この行事は室町時代から昭和初期にかけてほぼ四五〇年にわたって當まれた。

[注]

- (33) 久松清一編「増補新版 日本文学史3 中世」至文堂 昭和五〇年 四〇四頁
- (34) 西野妙子「後鳥羽院」国文社 昭和五四年 一二一頁
- (35) 古相正美「堂上和歌と神道・仏教との関係」『近世堂上和歌論集』明治書院 平成元年 四五二頁
- (36) 「水無瀬神宮文書」昭和一五年 一一頁。ただし、この表記は文献によって水無瀬廟など統一されていない。
- (37) 同右 三六六頁
- (38) 古相正美「堂上和歌と神道・仏教との関係」『近世堂上和歌論集』前掲 四五三頁
- (39) 同右 四五四—四五五頁

## 第四章 近世の和歌（古典の継承とその解釈）

### 王朝文化への憧憬

近世に入り徳川家康によって江戸幕府が開かれ、ようやく長きにわたった戦乱に終止符が打たれる。徳川幕府による支配は二七〇年間にわたる泰平の時代をもたらした。江戸時代は日本独自の文化が形成された時代である。文化は本来、世界的にみて王族や皇族など高い身分の階級から下の階級へと伝わるのだが、この時代は逆説的な状況が起こった。徳川幕府の体制の下では流通経済が発達し、町人たちは消費都市・江戸で商いを行い次第に経済力をつけていく。力をつけた町衆は特権階級の人間に限られてきた芸事や学問をたしなみ、やがて独自の町人文化を形成していく。

近世初期、文化の中心はまだ京都にあった。江戸が幕府に制定されたとはいえ、武藏野の大地は草が茂り広大な田舎であったのに対し、京都では長い年月をかけて洗練をきわめた貴族文化が花開いていた。江戸の人々は武家社会に対する反動からか、天皇や公家文化を見直し憧憬の念を抱いた。この時代は復



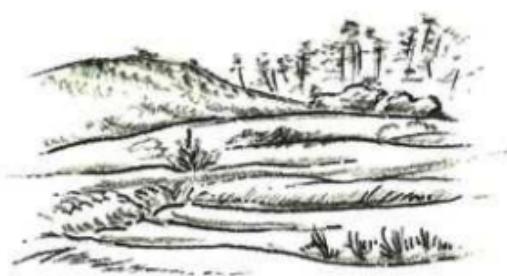
古的な王朝文化への憧れがあり、王朝文学のエッセンスを集約した「源氏物語」が一般に広く読まれるようになつた。木版活字の導入によつて出版技術が進歩し、特權階級の人間に限られた古典が量産されたからである。これによつて古典が一般へ普及し、詩歌人口も爆発的に増加した。

この章では近世初期における王朝文化全盛の時代から、江戸中期以降、和歌の大衆化によつて市井の人々に歌枕「水無瀬」がどのように詠み継がれたかを検証していく。

#### 後水尾院と堂上歌壇

元和元年（一六一五）、徳川幕府は禁中並公家諸法度を公布した。幕府は朝廷を政治に介入させないため「天子は諸芸能の事、第一は御学問なり」と規定し天皇に学問以外に生きる道は許さないという選択肢を突きつけた。この時代に即位したのが後水尾院（一五九六—一六八〇）である。

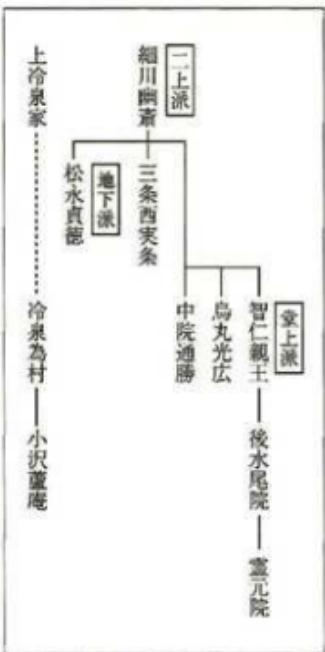
後水尾院はこの時代の王朝文芸の流行を盛り立てていつた立役者であり、いうなれば近世初期最大級の文化人であつた。在位中は幕府の朝廷に対する締めつけが最も厳しく、このような政治的背景から院は学問や芸事に集中せざるを得なかつ



たという。しかし院はもともと文学的資質を備えていたようで、和歌を筆頭に立花、茶道に儒教ひいては建築や造園に関心を寄せ、諸芸に優れていたという。

なかでも後水尾院が造営した洛北の修学院離宮は名園として現在も広く知られている。院は修学院離宮の仙洞御所に、公家、武家、僧侶、町人など、身分を問わず立花や和歌など各々の芸に秀でた者を集めて、頻繁に御会を開いた。それだけではなく経済力に乏しい芸術家を支援しその才能を伸ばすというバトロンとしても活躍した。後水尾院が主催した寛永文化サロンは立花の池坊専好を輩出するなど、京都の町人文化を活性化する大きな役割を果たした。

京都の文事を支えた後水尾院が、数ある文事の中で精力を注いだのが和歌である。室町時代以後から、和歌の奥義の一つに「古今伝授」というものがあった。この「古今伝授」とは、安土桃山時代の武将・



### 歌人系図(堂上歌壇)

細川幽斎（一五三四—一六一〇）から始まつたとされ、和歌集の本文や難解な言葉の解釈を口伝することである。幽斎は「古今伝授」を智仁親王に受け、後水尾院は智仁親王から継承した。

後水尾院は和歌を詠む者に歌道の

最終到達点として「古今伝授」を授けることによって、権威を与えるというシステムを確立した。天皇家が代々「古今伝授」を受け継ぐという制度をつくつたことで、名実とも院自身が歌道の頂点に立つたのである。

幽斎から「古今伝授」を受けた歌人には中院通勝、烏丸光広、三条西実条さとひきじつじょうがいる。歌道家では二条、冷泉、飛鳥井、日野家もこの中に含まれる。彼らのように幽斎から「古今伝授」を受けた貴族、皇族の系統を指す代表的な歌道家を総称して「堂上派」どうじょうばと呼ぶ。後水尾院在位の寛永期は宫廷の文化を復興していくこうという気運が高まり、堂上派歌人と後水尾院は「寛永ルネッサンス」と呼ばれる一時代を築いた。

### 島本と後水尾院

それでは、島本と後水尾院との関わりについて触れてみたい。「島本町史」によると、寛永八年（一六三一）、水無瀬宮は火災により本殿が焼失した。新社殿は寛永一八年（一六四一）、御所に使用されていた建材が宮中から寄付され見事に復興を果たしたようだ。このとき社殿の復旧に精力を注いだのが後水尾院といわれているが、実は定かではない。



煙心亭

宮内にある茶室「燈心亭」も後水尾院が水無瀬宮に寄贈したと伝えられている。この茶室は、江戸寛永期を代表する茶室として大正一五年（一九二五）に国の重要文化財として指定された。後水尾院はこの茶室に紅葉や桜の時に茶人や歌人を集め、ささやかな会を催したのではないだろうか。

後水尾院と水無瀬の直接的な関わりを示す出来事は、後鳥羽院の追善和歌会であろう。寛永一五年（一六三八）は後鳥羽院の四百回忌にあたるとして、後水尾院をはじめとする宫廷歌人によって追善和歌会が営まれた。この年は幾度か忌御会が営まれたようであるが、代表的なものとして「後鳥羽院四百年忌御会」が挙げられる。

四百年忌御会は資料によると上賀茂神社の社家の松下氏の主催、依頼により集められたものらしい。忌御会には三〇首奉納されており、後鳥羽院の歌を本歌取りするものが大半を占める。その内容は院を偲んだものや、院の流れをくむ宫廷の繁栄を祈願した内容に貫しており、四〇〇年を経てもなお特別な感慨が寄せられている。

こひつゝも鳴くや四かへり百千鳥

霞隔てて遠きむかしを

（四〇〇年の昔が遠く霞で隔てられているのを、春の鳥たちは恋い慕つて鳴くのだろうか）

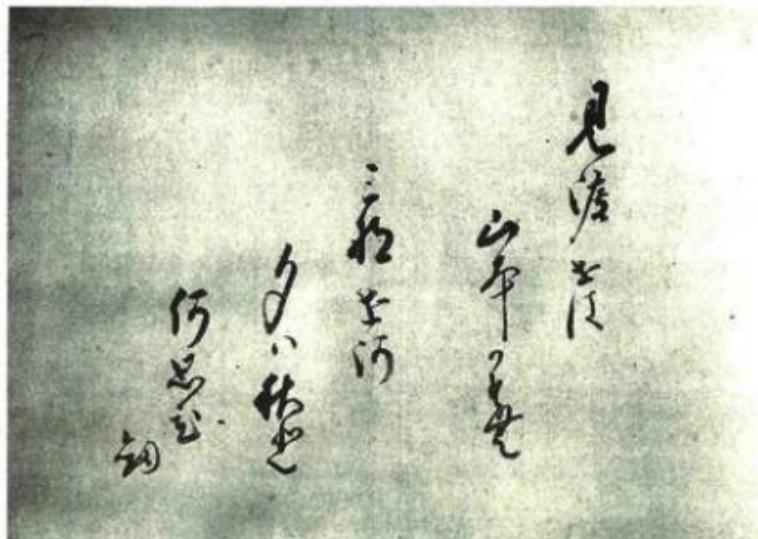
（霞・後水尾院）

ちなみに後水尾院の御製は後鳥羽院の「百  
千鳥さへづる春のあさ緑野べの霞に匂ふ梅が  
枝」(後鳥羽院御集)を本歌取りしている。<sup>(注)</sup>

次に行われた「四百年聖忌水無瀬宮江奉納  
和歌短冊百首(五首欠)」は、水無瀬宮へ奉納  
する法楽和歌として作成された。この御会の  
開催年月日は明らかではない。主催はここで  
も後水尾院であり、この会では一〇〇人の歌  
人が歌を寄せており、歌の内容も上記の歌会  
とほぼ同じものであり、参加した歌人もほと  
んど同じである。

この年、後鳥羽院から水無瀬離宮の地を預  
かり、代々御影堂を守り水無瀬の姓を名乗る  
ようになつた水無瀬氏成は、四百回忌にあた  
つて隱岐国その後鳥羽院墳墓に参拝している。

自作和歌二〇首と御製の歌を墳墓の前で講じ



後鳥羽院御製(後水尾院廣筆 水無瀬神宮蔵)

『隱岐の記』にまとめ、水無瀬宮へ奉納した。現在残されている資料から、後水尾院は後鳥羽院の追悼和歌会を少なくとも三回は催している。戦乱の世を経て再び宮廷文化復興の兆しをみた天皇家、公家たちにとつて、院の四百回忌がいかに特別な行事であつたかが想像できる。

後水尾院が後鳥羽院の四百回忌を重視した背景として、院は自らの立場を後鳥羽院になぞらえ意識していたと考えられる。後鳥羽院は和歌最高峰の作品として挙げられる『新古今和歌集』を送りだし、宮廷歌壇を牽引していった。それに対し、後水尾院は文学者として自ら宮廷文化を再興させた自負があつた。

また、鎌倉幕府との軋轢から反乱を起こし隠岐に流された後鳥羽院と、江戸幕府からの執拗な政治圧力を受けた後水尾院の置かれた境遇も共通している。似通った境遇ということもあるが何よりも和歌に傾倒した後水尾院が後鳥羽院を偉大なる和歌の先達としてあがめていたことはいうまでもない。後水尾院は後鳥羽院の歌を本歌取りした和歌を多く残している。その一つを紹介する。

水無瀬川遠き昔のおもかげも

立つや霞にくるる山もと

(霞・後水尾院御集)

(水無瀬川の山麓に霞がかかり、後鳥羽院時代の遠い昔の面影も(霞)立ち上るなあ)

## 後鳥羽院への追悼和歌

それでは、後鳥羽院の没後を追悼して行われた大きな節目では、後鳥羽院への憧憬を指し示す歌枕「水無瀬」はどのように表現されていたのだろうか。堂上派の頂点に立つ歴代天皇の歌を、四百年・四百五十年・五百五十年聖忌に詠まれた歌を取り上げてみたい。

### 四百年聖忌

ゆふへとはみしをいく世の光にて

かすみそめたる春の山<sup>日本</sup>

(夕暮れは秋というが、何世代にも渡る水無瀬の光(後鳥羽院の威光)によつて霞が染まつてゐる春の山のふもとよ)

### 四百五十年聖忌

宮ゐしていまもあかすや水無瀬川

ゆふへは春のかすむやまもと

(春日望山・靈元天皇)

(春の夕暮れは山のふもとが霞がかつて趣き深い。後鳥羽院が居らつしやる水無瀬川は今も明るいことよ)

五百五十年聖忌 水郷春望

みなせ河その山本のかすみにも  
しのふむかしの春のあけほの

(水無瀬川をながれる山のふもとにたなびく霞にも、後鳥羽院の昔が偲ばれる春のあけほの)

(後桜町上皇)

上記の歌はすべて御法楽の巻頭で詠まれたもので、ここでは後鳥羽院の「見渡せば山もとかすむ水無瀬川夕べは秋と何思ひけん」を本歌取りしている。この追悼行事の目的は後鳥羽院の靈を慰め、和歌の上達を願い宮廷の繁栄を祈念することである。こういった点を考慮に入れ四百年聖忌の追善和歌から一五〇年経た五百五十年聖忌の歌を比較すると、歌の内容が全く変わらないことに驚かされる。

水無瀬殿法楽和歌は、会の性格上後鳥羽院の歌を下敷きに、それも大きな追善式典のときは「見渡せば……」の歌を引くのが適当であろう。しかし、水無瀬に連想される後鳥羽院の「離宮跡」「霞」「春」「山もと」「夕べ」と同じ句を頻用することによって歌が画一的になってしまふ。その結果、水無瀬を詠みこんだ歌は必然的に春を題詠にした單調なものばかりになってしまった。これは歌枕が、類型化から逃れ得ないという永遠の問題点なのである。

## 和歌の伝承

奈良時代に詠まれた「水無瀬川」の歌は、恋にもがき苦しむという詠み手の強い切迫感を感じられた。また、中世を代表する藤原定家の歌は技巧に走り過ぎのきらいはあつたが、独特の語感と繊細なフレーズが印象に残つた。後鳥羽院の詠んだ叙景歌は、君主ならではのおおらかな感性がみずみずしく写し出されていた。こうして歌謡「水無瀬川」は時代とともに歌人の心を紡ぎ出してきた。

一方、堂上派の歌は、歌謡のパッチワークといったようで、意味が何層にも重なつて詠み手の心情が伝わつてこない。堂上和歌の歌論とは、古今、新古今をはじめとする中世歌学を基盤とし、古歌の教養、本歌取りの技巧を重視することである。よつて、彼らの歌風に新しさはなく、従来の表現に依拠したものになつてしまつた。

江戸中期に入ると、伝統を固持する堂上派の歌学に対して、和歌の革新を唱える者が出現した。知識や教養に大きく負う堂上派の歌とは違う、何か新しい歌を模索しはじめた。文化の担い手は江戸の町衆へと受け継がれ、狂歌や川柳など新たなジャンルの歌が創出された。

和歌の分野では天皇家から精力的に歌を指導する人物が傑出せず、やがて勢いを失う。かつて文学の主流であつた和歌は次第に周辺部へと追いやられ、宫廷歌壇は伝統的な和歌を保持するにとどまつた。法樂和歌の歌人は大半が堂上派によつて占められており、近世に入り歌の形式が多様化していくなかで、彼らはあえて前時代の和歌を繼承し伝統的な歌風を尊重した。

この時代まで来ると、奈良時代から蓄積されてきた歌語は膨大な数にのぼり、和歌作りはその圧倒的な量の歌語をただ型式にはめていく作業となつた。宫廷歌壇にとつて、和歌とは彼らの文化であり古歌の蓄積を尊び、次に伝えていくことが彼らの使命だつたのだろう。現在の冷泉家を継ぐ冷泉貴美子は「家に伝わる型を踏襲していくことが、文化であり……それは創作という感覚ではなくて、むしろ型をどう伝承していくかというようなことが、家業としての和歌である」と述べている。<sup>(45)</sup>

このような態度こそが数百年にわたつて水無瀬宮法楽和歌が詠み続けられた大きな礎であつたといえよう。堂上派歌人にとって後鳥羽院の地「水無瀬」は、守り伝えねばならない和歌の文化を象徴する場所だったのではないだろうか。

### 地下歌人の出現

近世初頭は堂上派和歌全盛の時代であつたが、一方で新たに地下歌人と呼ばれる人々が出現した。地下歌人とは、皇族、貴族以外の宮中に上がることが許されない一般の歌い手を指す。江戸初期を代表する地下歌人・松永貞徳(一五七一～一六五三)は父親に連歌師をもつたことから、歌道の指導を多方面から得ることができた。幸運にも彼は幽斎から歌学の秘傳である「古今伝授」を受けられたのである。

近世初期の和歌史の流れは後水尾院を中心とした堂上派と、貞徳の門人たちによる地下歌人たちとに大きく二つに分かれる。貞徳の名は山崎宗鑑らの俳諧連歌の流れを継いで近世初頭に新しい俳諧を確立

したことでも知られているが、和歌に関しては堂上派の歌論を踏襲するにとどまつた。

初期の地下歌人らは本家よりも保守的であるといわれ、当時の価値観では堂上派は絶対的な権威であった。そのため貞徳をはじめとする門人たちは堂上派の歌論を批判したり、そこから逸脱した歌を詠むということはなかつた。歌に関して特に突出した点はなかつたが、貞徳のもつとも大きな功績は、多くの門人を育て優れた歌人を輩出したことである。本来、口答で受け継がれ門外不出であった「古今伝授」が、彼らのような地下歌人に伝わり公にされることによって、民間に詩歌が広がる契機となつた。

江戸中期に入ると、文化の中心は京都から江戸に移り貨幣経済で力をつけた町衆が圧倒的なエネルギーで新しい歌の世界を開拓していく。俳諧連歌は俳諧へ、和歌の奥義の一つ本歌取りはパロディに置き換えられ狂歌へと発展し、人々は滑稽で洒脱な新しい歌を求めはじめた。

### 国学の始まり

和歌自体の人気は下火となつていたが、古典研究の気運が高まり和歌を対象とした学問が盛んに論じられるようになつた。国学の始まりである。

江戸中期から後期にかけて国学者たちは独自の歌論を唱え、活発な文芸活動を展開した。元禄期には戸田茂睡が自由な詠歌を唱導し、中期の国学者・賀茂真淵（一六九七—一七六九）は、歌は人の心を表現したものでなければならないと唱えた。各々が自らの歌論を打ち立てたが、その根底にあつたものの大

半は、堂上派に対する批判と、歌とは自らの心を表現するものであるということであった。

なかでも賀茂真淵はおおらかで力強い「万葉集」の歌を理想の和歌と考え、「万葉集」の古語研究に着手する。古の人々の心を知るために「万葉集」を通して古語を研究するという真淵の方法は、実は近代の文献学的研究へとつながっており、当時では革新的であった。彼の実践は後に本居宣長へ大きな影響を与えるなど、真淵の万葉復古論を契機に江戸に国学が広まっていった。

近世の国学者が研究対象としてきたもの、それは和学である。和学とは和歌の研究を意味する。近世中期以降、国学者は日本の古典を通して日本とは何かを探求しはじめた。「あはれ」や「をかし」など、現代でもなじみのある文芸理念は国学者が古典を通して発見したものである。しかし近世初期の段階では、和歌という日本文化の古典的教養は学問として成立していなかつた。

国学者の古典研究をまとめた桑原恵氏は「古事記」「日本書紀」はともかく、「古今集」や「新古今集」などの和歌集は、「古典」的教養書であつた。ただ、それはあくまでも教養のための古典であつて、それ

を研究の対象とし、学問を成り立たせる古典としての地位を与えられていたわけではなかつた。すなわち、和学は近世の学問の主流ではなかつた」と説明する。<sup>(2)</sup>

近世中期ごろから国学者が和歌を研究の対象



国学者系図

としたことによって、歌枕を捉える新しい視点が派生したと考えられないだろうか。

そこで江戸中期から後期にかけて活躍した二人の国学者たちに焦点を当ててみたい。「源氏物語」研究で名高い本居宣長と、国学者としての印象は薄いが不条理な怪異小説「雨月物語」を書いた上田秋成、彼らはともに水無瀬を訪れて歌を詠んでいる。古典研究をキーワードに、国学者である彼らの歌を通して地下の人々がみた近世の水無瀬を読み解いていく。

### 本居宣長の名所研究

近世最大の国学者・本居宣長(一七三〇—一八〇一)も水無瀬を訪ねた一人である。宣長は『古事記』研究でよく知られているが、若いころは『源氏物語』や『新古今和歌集』を理想の書とし、王朝文化に強い憧れを抱いていた。大きな転機となつたのは賀茂真淵との出会いである。宣長は真淵の古代を理想とした和歌論や実証主義的な学問法に共感し、『古事記』に着手する。真淵は万葉の古語研究にとどまつたが、宣長は『古事記』『万葉集』の文献学的研究を通して日本固有の文化及び精神を明らかにしようとした。

寛政五年(一七九三)三月二〇日、宣長は大阪から京都へ帰る途中、水無瀬離宮を訪ね、その後、山崎の八幡宮に参詣している。そのときの歌五首が歌集『鈴屋』に所収されている。その内の二首を引用する。

みなせ河なびく柳もほのはのと

春風かすむ山本のさと

(水無瀬川の川岸に柳がほのはのとなびいて、山のふもとは春の風で震んでいる)

みけむかふみなせの宮の跡ぶりて

竹のはやしも神さびにけり

(神々しい水無瀬宮の跡も年月を経て、竹林も嚴かになつたなあ)

宣長は「万葉集」を模範の和歌としながらも、堂上派の指導を受け終生「新古今和歌集」に傾倒していた。初めの歌はいうまでもなく後鳥羽院の「見渡せば山もとかすむ水無瀬川……」を下敷きに詠んだものであり、次の歌も在りし日の水無瀬宮を偲んで詠んだ歌といえる。宣長の歌は前述の堂上派歌人と同じ態度で水無瀬を詠んでいるが、これらの歌には彼らのような感慨はあるのだろうか。歌は一見同じように見えるがおそらく全く違うのだろう。

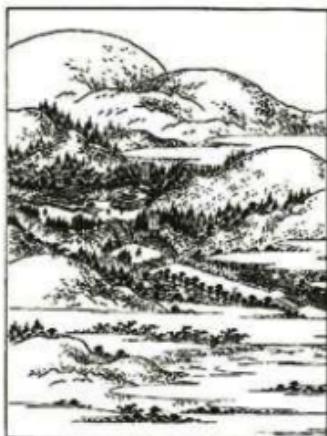
なぜならば地下出身の宣長にとって、歌枕「水無瀬」に天皇家を寿ぐ必要もなければ宫廷社会への回帰を願う必要はない。彼は歴史の舞台にあった後鳥羽院の離宮跡を訪ね、院の「見渡せば……」の句を

踏んだ歌を詠んだ。その姿勢はむしろ感傷というより、歌枕を訪ねそこに相応しい歌詠みをするという実践的学問の色合いが濃い。これは、国学者が紀行を通して和文の修練に勉めるといった要因があったと考えられるのである。

江戸の紀行文を研究する板坂耀子氏は、宣長の紀行文には「古代への憧憬」「臨地調査」「考証」という三つの要素が挙げられるとい<sup>(8)</sup>う。水無瀬は貴族文化残照の地として歴史的情緒があり、また後鳥羽院の名歌が詠まれた土地として名高い。宣長にとって水無瀬は歌を詠む研究対象として充分に条件を満たしていたのだろう。名所を訪ね歌を詠む、観光とも和文の修練とも厳然と区別し難いが、いわばそれは宣長の日々折々の日常的な実践であったことが歌集からうかがわれる。

### 上田秋成　虚構の水無瀬川

上田秋成(一七三四—一八〇九)にいたっては解釈が難しい。秋成は「雨月物語」の作者として名高いが、国学者としても執筆活動を行なっている。二〇歳前後から俳諧に遊び、国学書、独自の神話觀をもつ怪異小説などを著したりと、特にとらわれない文学活動を展開した。秋成の不条理な物語の展開は近代の文学史観に沿わず、なかなか受け入れ難く評価されてこなかつたが、反面、秋成文学の世界を解きあかそうと解釈に挑む研究者は現在も後を立たない。



現在の椎尾神社



摂津名所図会卷之五〔摂津名所図会〕第一巻 臨川書店(平成8年発刊)

人々の名所探訪の手助けとなつたのが全国各地の名所図会である。

摂津名所図会では、水無瀬は大山崎西觀音寺の項で登場する(上)。西觀音寺は江戸時代に繁栄したが、明治初年の神仏分離令により神社に改め、現在の椎尾神社となった。

また摂津名所図会では水無瀬滝、水無瀬川、水無瀬口、水無瀬殿などの歌枕を詠みこんだ古歌が紹介されている(下)。

安永九年（一七八〇）、四七歳の冬一〇月に水無瀬川を訪れたことを、歌集「藤蓑冊子」<sup>つづらふみ</sup>卷五の「水無瀬川」と題する漢文に記している。

### 水無瀬川

安永庚子冬十月、遊于京師、道歷損北、而過水無瀬川、之在千山城國界也、然迺流尋徑、乃入溪澗中、巖上之飛湍高丈許、所懸激浪撒珠、其響与松風相應、濺々走一下、未陟百步、水淺涓涓、石出沙明、旋入幽草裏、忽然不見下流、而溪逾林過、即出前路、則厓間丈余、水勢倏洶湧、足以灌田野矣、於是始覺其脈潛地中、及于此復湧出乎、說文云、水脈行地中、湧々、蓋此類也、嗟呼造化一奇事哉、于此古人之詠詩、不待解而旨趣自了然、因以賦之二章、

ありてなき よのためしとは かつしつど みなせのかはの めずらしきかも

阿里○那幾、豫乃多免之登波、加都志連騰、美雞世能河伯廻、女豆羅師伎可母、

（あるようでない世の中のことは分かってても、水無瀬川の光景は珍しいことだなあ）

みなかみは もみぢればそ みなせかは したにもあきの いろはかよへる  
微南河味八、毛三連知礼婆叙、弥奈勢我破、斯堂仁文安紀乃、以呂半迦与部類

(水無瀬川の上流は紅葉が散るので下流にも紅葉の葉が流れ落ちて秋の色が通っている)

「藤葉冊子」は和歌史のなかでも特異な存在で、和歌と和文、漢文を集めた歌文集である。「水無瀬川」を簡単にまとめると次のようになる。

安永九年冬一〇月、大阪から京都の師匠に会うため水無瀬川を通った。道を尋ね流れを廻ると渓流の中に入つた。そこでは激しく水がぶつかり水しぶきが高く飛びちら。その様子は松風が激しく吹いたようで水流がすごい勢いで流れていが、百歩ほど歩くと水がちよろちよろと流れ、石や砂が出ている。廻つて竹藪に入ると忽然と流れが見えなくなり、林を抜け目の前の前の道に出ると田野にすぐには充分な水が湧き上がるよう流れているのを見た。全く不思議な自然の造形だと感嘆し、歌を詠んだ――。

果たして水無瀬川がこの文面にあるような情景であつただろうか。「藤葉冊子」の和文では、「眼前の実景が想像によつて侵食され、いつのまにか虚構の世界に組み替えられていくプロセスが描きとられてゐる」という。秋成の歌や物語は中国の故事や漢詩を下敷きに、現実と虚構が交差した物語が隨所にちりばめられている。

この歌の解釈を「歌人上田秋成」を書いた吉江久彌氏は、「恋歌の用語を用いながら鋭い美意識と語感によつてこれを全くの叙事歌とすることに成功した一首であると思う」という。<sup>14</sup>

## 国学者たちの水無瀬

秋成が「水無瀬川」に意図したものは何か。先述したように『藤蔓冊子』は和漢文の短編が雜居した和歌文集である。内容は日本、中国の古典と漢詩文の語句をもとにテキストが紡ぎ出されている。秋成は和文という文体から何を描き出そうとしたのか。長島弘明氏は『秋成研究』の中で「一般に和文は和漢の古典を下敷とした擬古文である以上、筆に写される対象は、風景にしろ事物にしろ、現実にある風景や事物の正確な際限ではなく、古語のもつイメージの喚起力によって古典の世界と重層化し、虚構性を帯びることは言うまでも無い」と解釈している。<sup>(3)</sup>

この指摘にしたがうと秋成は現実の水無瀬の風景から、古語となつた「水無瀬川」を想起し、虚構の水無瀬川を創出したと考えられる。水無瀬川の底に流れる伏流水の光景を思い浮かべながら漢文の世界観と重ね合わせ、その虚構の風景を想像して歌を詠んだのが秋成の本意ではないだろうか。

秋成が現実にある風景を眼前にし、その土地から万葉の言葉を思い起こし「水無瀬」の歌を詠んだと仮定しよう。ここではかつての現象に対し逆説的な行動が浮かぶ。水無瀬殿御法楽が宮中で行われてゐるのに対し、秋成はその土地に居ながらにして違う時空へと思考を馳せる。水無瀬に居ながら、歌枕「水無瀬」を詠まないのである。そこから明らかに秋成が故地(古くからの縁故のある土地)に対する感傷やノスタルジーと決別した態度をとつてゐるのが分かる。

国文学者にとつて水無瀬は堂上歌人らのよう個人的な思い入れのある場所ではなく、学問の対象と

した古典修練の場の一つにすぎなかつた。宣長、秋成に共通する点は、ともに直接水無瀬を訪ねているところである。江戸中期、彼らが活躍したころから国学者、蘭学、水戸学などの学者、文人が日本各地を旅しはじめたという。名所旧跡や歌枕の故地めぐりは一般に拡がり、人々の目的が観光か信仰か非常にあいまいとなってきた。

彼らにとつてもそれは同様のことと考えられ、水無瀬へは古典修練とともに偉大なる和歌の先達後鳥羽院が遊んだ離宮跡すなわち文学的記念碑として訪問したのであろう。宫廷歌人たちにとつての水無瀬と地下歌人たちにとつての水無瀬、彼らはともにここを「古典の地」と仰ぎながらも、根幹にある精神は異なつた。堂上派歌人は伝統の存続に努め、国文学者は伝統の解釈を試みたのである。

## 〔注〕

- (40) 信長、秀吉、家康三代に仕える。近世歌学の祖と称される。
- (41) 「島本町史」六九六頁 井上貢氏の指摘。水無瀬神宮文書も参考にした。
- (42) 「寛永十五、一六、一七、一八、後鳥羽院四百年遺稿、松下勲選」と原本にある。上野洋三校注「新日本古典文学体系68 文集 上」岩波書店 平成八年
- (43) 同右 一七頁
- (44) 後鳥羽院御集では歌中の「水無瀬」を「幾世」と詠んでいる。

- (45) 冷泉為任監修「冷泉家の歴史」朝日新聞社 昭和五六年 一七九頁
- (46) さくさけばみなれぬ浪の漲りてみなせの川の名にぞたがへる 貞徳
- (47) 桑原恵「古典研究と国学思想」(類軸一編「日本の近世13」) 中央公論社 平成五年 二五八頁
- (48) みなせ川ふくとは見えぬ春風も有りてゆくせになびく青柳、水無瀬川山本かすむおもかけの昔もとほき春の夕ぐれ、おもかげも春やむかしの水無瀬川山本遠き夕がすみかな、など。
- (49) 板坂耀子「江戸の旅と文学」ペリカン社 平成五年 一四三頁 紀行文「普豈日記」についての指摘。折々隨感の詠歌、雜記に近い日記として紀行文を記したとも指摘。
- (50) 長島弘明「秋成研究」東京大学出版会 平成二二年 三三三頁
- (51) 吉江久彌「歌人上田秋成」桜楓社 昭和五八年 四五一四六頁
- (52) 長島弘明「秋成研究」前掲 三二一頁

## 第五章 伝統の終焉と再考

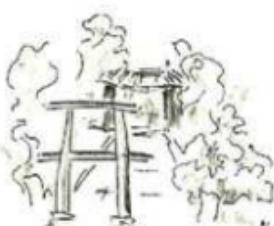
### 明治維新

二七〇年近くにわたって支配を続けてきた徳川幕府が崩壊した。戊辰の内乱や諸外国の圧力に対して、早急に中央集権的な統一的組織と制度を構築する必要があった。

そこで、明治新政府は、まず明治四年（一八七一）に廃藩置県を断行し、旧米の幕藩体制を一掃した。さらに、明治五年（一八七二）に徵兵制、地租改正、明治六年（一八七三）に学制発布と矢継ぎ早に大改革を推進していくた。

さらに、立憲政治の実現のため、明治二年（一八八九）大日本帝国憲法を発布し、翌年帝国議会を開設した。この憲法は、天皇主権の原則にたち、陸海軍の統帥、宣戰・講和その他条約の締結など多くの権限を天皇に与えていた。

その余波は、室町時代から静かに営まってきた水無瀬の御法楽にも少なからず及んだ。江戸期の法楽



和歌は天皇が自ら詠じていたが、明治二年（一八九八年）に行われた六百五十年祭奉納和歌は、山階宮見親王の歌が五〇首のうちの二首のみ「水無瀬神官文書」に載せられているだけで、明治天皇の歌は見当らない。

この理由として、天皇の公務が文芸から政治へと変わったことが第一に考えられる。また、法楽とともに担つてきた皇族の男子もまた皇族身位令として軍人に定められた。さらに遷都による天皇家の移転にともない公家の多くも京都を離れたことも挙げられる。明治維新後、彼らを取り巻く政治状況の変化、地理的要因などから天皇家主導の歌会を行うのが難しくなったのではないか。



水無瀬神官文書

#### 後鳥羽天皇七百年御式年祭

昭和一四年（一九三九年）三月一日、官幣中社水無瀬宮は大社の称号が授けられた。天皇を祀った神社は「官幣大社」として、皇族のは「官幣中、小社」に祀られた。補足として天皇を祭神とする神社の主要なものは「神宮」、皇族のそれは「宮」と称された。

同年四月四日、「後鳥羽天皇七百年御式年祭」が載かれて執り行われた。この式典に関する経緯、内容が水無瀬神宮が発行した「後鳥羽天皇式年七百年祭水無瀬神宮御法樂和歌集」に記されていたので紹介したい。この式典は政府の後ろ立てがあつてのことと考えられるが、文書によれば、代々後鳥羽院の御影を守ってきた水無瀬家が内閣府に式典を執り行うにあたっての願書を提出し、主催する運びとなつたようである。当時の官司水無瀬忠政が提出した内閣府の文書に次のような意図があつたことが記されている。水無瀬神宮を官幣大社に昇格させるという文書の一部に「殊ニ当今國家未曾有ノ難局ニ際会シ國体明微ノ声愈々旺ニシテ國民精神ノ昂揚一層緊要ナルノ砌」とある。<sup>(4)</sup> 国家は今、未曾有の難局にあり、国力が弱ってきてるので国民精神の昂揚が緊急に必要であるため、「後鳥羽天皇七百年御式年祭」を執り行うのである。

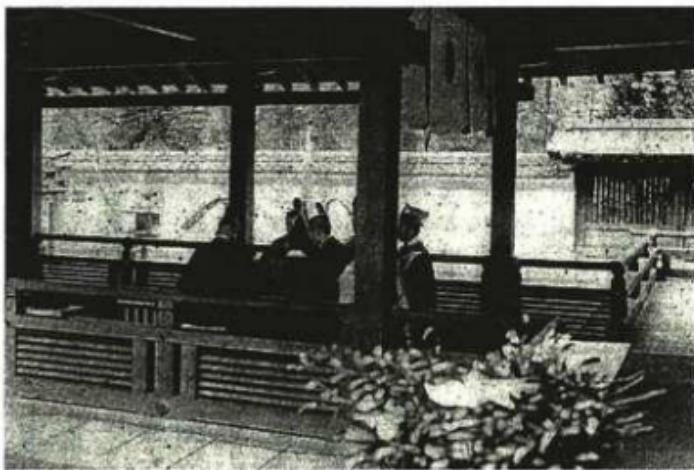
この時の当主は華族に列せられ子爵の称号を持つ水無瀬忠政であった。水無瀬家の他に三条家、日野家、清閑寺家、冷泉家など、法樂和歌とともに担つてきた歌道家が協賛している。

法樂和歌は五〇年毎の御聖忌に、天皇の御製および皇族の和歌が水無瀬神宮に奉納されていて、この七百年式典には一般からも歌を公募している。明治二年から天皇家は歌会初めの歌を一般から公募しており、おそらくそれに倣つたのであろう。歌題は「水郷朝」が指定され、公卿たちが歌の選定をしたようである。

東京に移った公家は当然のこと、称号の無い一般の人々の歌も歌集に掲載された。当日は雅樂の演奏



水無瀬神宮へ参向する宮内庁勅使(後鳥羽天皇七百年式年)



水無瀬神宮内での披講の様子(後鳥羽天皇七百年式年)

に始まり、皇族の和歌とともにこの日に向けて集められた和歌が披露され、奉納された。その後貴賓として参加した久邇宮殿下、大阪府知事、内務省高等官らが玉串を献じ再び演奏が行われ閉会したと記録されている。

水無瀬神宮のような「天皇、皇族を祭神とする神社は、国家神道の教義を直接表現した宗教施設」であり、「この種の神社は国民の間に天皇崇拜を定着させ、近代天皇制国家への忠誠心を普及するための役割を担つた」という。

例えは、皇族が奉納した法樂和歌の中に「神」を詠んだ歌が二首あつた。

神のます水無瀬の里は清くして

ふくあさかせも静けかりけり

（梨本宮守正王妃伊都子殿下）

（神のいらっしやる水無瀬の里は美しくあつて、朝吹く風も静かなことだなあ）

従来の法樂和歌に後鳥羽院を直接「神」として詠んだ歌は存在しておらず、式典の時には天皇を神として仰ぐ思想が法樂和歌にも反映しているといえよう。

昭和一四年に刊行された京阪電鉄の「水無瀬・山崎附近」というガイドブックには水無瀬宮の沿革が紹介されている。当時の世相が映し出されているので、その一部を抜粋する。「今や後鳥羽天皇の御七百

年祭を迎えるとする。(中略)隱岐の海に荒き波風を凌ぎ給うた後鳥羽天皇・後醍醐天皇の憂き月日を回顧し奉り、今更ながら昔の御門の御苦慮に感泣し、往古に憤り、今時に悦び、いよいよ忠誠の赤心を大君に捧げ奉らばやと、天神地祇に誓ひ奉る」とある。<sup>(4)</sup>

当時はまさに明治二七年(一八九四)の日清戦争から始まり、日露戦争、第一次大戦。さらに満州事変そして日中戦争へと戦争と経済発展、帝国主義国家として邁進していた。

動乱する政情の下でこのような豪奢な式典が行われたのは、上記の資料からも実証できるように天皇への忠誠と国民の志氣を高めようとした政治的意図があったと考えられる。皮肉にも歌枕「水無瀬」は、後鳥羽院の時代を回顧する内容から天皇を礼讃するキーワードへと変化していくのである。

### 変わらない風景

昭和二〇年(一九四五)、日本のボツダム宣言受諾により、限りなく長かった戦争はようやく終結した。戦争、さらに終戦後の改革によって天皇家、公家社会も大きな変動を受けた。歌道家で名高い冷泉家でさえ、当主が兵役として徴兵され戦死している。さらに、華族はもとより皇族の半数は皇籍を離脱し、平民となつた。戦後民間人となつた彼らにとつて、歌道家として存続していくことは容易ではなかつたはずである。天皇家、公家社会という後繼者を失つた御法樂は室町から続く歴史を閉じることとなつた。

それでは水無瀬に文学的関心を寄せる国文学者たちの系譜は近代に入つてからまつたく途絶えたのだ

ろうか。本居宣長や上田秋成のような古蹟を訪ねて和歌の修練に勉めるようなことは見られないが、文豪谷崎潤一郎（一八八六—一九六五）は昭和七年（一九三二）の秋に水無瀬を訪れ、小説『蘆刈』にまとめた。詩歌ではなく小説の形式ではあるが、文豪ならではの卓越した風景描写から當時を知る手掛かりとして取り上げてみた。

主人公の「わたし」（谷崎）はある日「ちょっと考えつかないようなわすれられた場所」はないかと思案した末、「増鏡」を読んで以来、後鳥羽院の「見渡せば……」の歌に懐かしい風景を覚え、水無瀬の宮へ行くことを思い立つ。旧京阪電鉄の「山崎駅」を降り、院の離宮があつたであろう場所、淀川と水無瀬川の合流地点に立ち、後鳥羽院が見たであろう光景に思いを巡らす。谷崎は水無瀬を良い意味で「凡山凡水」と称しており、桜や紅葉などの名所でもとりたてるほどの景もないが、そこには院の時代から変わらないであろう風光があったと追想する。「なだらかな丘と、おだやかな流れと、それらのものをいつそうやんわりほやけさせている夕もやと、いかにも大和絵にありそうな温雅で平和な眺望なのであ



島本町水道局には「蘆刈」と名づけられた飲み水コーナーが設置され、多くの人に愛用されている。

る」と。

そして中秋の名月を見ようと日が暮れるのを待ち船で淀川の中洲に降り立ち月を眺め、感慨に耽つていると一人の男が現れ身の上話を始める。ここから本筋が展開していくのだが、水無瀬の歴史と風景が幻想的な物語の一助となっているといえよう。谷崎は『薙刈』の前にも、南北朝時代の後醍醐天皇を取材した『吉野葛』などを執筆しており国文学書や古典などを好んで読んでいたという。

谷崎の作品からも分かるように、当時の水無瀬は、後鳥羽院離宮の旧跡として知る人ぞ知る場所であり、限られた人々によって細々と追悼が営まれてきた。

戦前の水無瀬神宮は、社格が昇格し厳かな式典が行われたが、戦後再び水無瀬で追悼和歌は営まれなくなり、さらに文学の地として畏敬を払つてきた文人たちも水無瀬を作品に取り上げることは否定的であつたと考えられる。

また、戦後の復興、近代化へと邁進する社会のなかで、和歌はすでに前時代的なものであつた。和歌の神が奉られた水無瀬神宮は、北野天満宮のような学問の神を奉るという普遍性を持ち得ず、後鳥羽院を追悼する人々を失つた水無瀬宮はその連絡と続く法楽の伝統や追悼の精神も人々の記憶から消えていき、昭和一四年の歌会が事実上最後のものとなつた。

水無瀬の和歌文化の灯火は消えかけたように見えたが、昭和後期には水無瀬の歌に関する興味深い解説本も出版された。林直道氏の『百人一首の秘密』(一九八一)、『百人一首の世界』(一九八六)は、藤

原定家が編纂した小倉百人一首の歌には隠された暗号があり、それを読み解くという興味深い本である。氏は百人一首の歌を縦と横に一〇首ずつ並べ、そこから連鎖した言葉を拾っていくと水無瀬の風景が託された歌織物が浮かび上がるというロマン溢れる説を立てた。これらはあくまで仮説の範疇を出ないが、氏の説に対する反論本、捕足本など同様の本が数多く出版されているので合わせて読むのもまた一興である。

### 郷土文化の再考

奈良時代から戦前まで歌の中に詠まれる歌語「水無瀬」が変遷していく過程を検証してきた。万葉集時代から水の無い川として「忍ぶ恋心」の比喩に用いられてきた架空の川「水無瀬川」が、天皇家や公家が遊獵に山崎、水無瀬を訪れたことによって、徐々に実在の川として認識されるようになる。

水無瀬川が実在の地名として認められるようになったのは、後鳥羽院が水無瀬に離宮を造営したことによる。後鳥羽院が水無瀬離宮で遊び、そこで春の水無瀬川をのぞみ「見渡せば……」を詠んだことによって、ようやく水無瀬は歌枕として



定着した。しかし、後鳥羽院の行幸に共挙した家臣たちは、水無瀬を後鳥羽院の榮華を称える場所として歌に詠む、という特異な展開を見せる。それとともに歌枕「水無瀬」の生成によつて近在する山、滝も歌に詠みこまれるようになった。

後鳥羽院が隠岐に流され宮廷社会の終焉を迎えると、歌枕「水無瀬」は、後鳥羽院の治世を回顧する内容へと変わっていった。戦乱の世には後鳥羽院の御靈を追悼する法楽和歌が盛んになり、貴族、僧侶が和歌を捧げるようになる。引き続いて江戸時代には朝廷の行事として法楽和歌は定着し、宮廷繁栄の祈念をこめて後鳥羽院を文学の神としてあがめる傾向にあった。このころになると、歌枕「水無瀬」は後鳥羽院の歌を下敷きにした歌風が定着し、一つの型へと収斂していく。江戸中期には大衆化が進み古典が一般に普及することによつて、市井の知識人たちは後鳥羽院の旧跡として水無瀬を訪れ、和歌への探究を深めた。

明治維新以後の水無瀬神宮は、天皇を奉った神社として政府に重用され官幣大社として華やかな式典が行われた。しかし戦後には戦前の天皇礼讃への反発に加え時代の流れからも和歌が一般的に詠まれる



勝幡寺縁起(後鳥羽院が百山の麓金谷で剣を鍛冶した際に勝幡寺に行幸されたと記されている。若山神社蔵)

ことは少くなり、結果文学の神としての信仰も広く認識されるに至らなかつた。このように歌枕「水無瀬」は奈良時代から近代という歴史の移り変わりとともに、その時代に生きる人々の思潮を映し出しえきたといえよう。

島本町は現在、大阪と京都を結ぶ通過点にあり、名神高速道路、JRに私鉄の幹線が町を貫き幾つかの工場も抱えている。その風景はおそらく後鳥羽院がみた水無瀬とはかけ離れたものとなつてゐる。しかし近年島本町では地域への見直しが進み、町の経済的発展とともに土地固有の文化や伝統の継承、保存に向けての取組みが積極的に行われてゐる。戦争によつてもたらされた歌の終焉は寂しいものがあるが、おそらくどの地域でも少なからず伝統の断絶があつたのではないだろうか。

歌枕「水無瀬」の中心舞台である水無瀬離宮は、現在の調査ではその場所は明らかにされていない。後鳥羽院在位中も度重なる水害で流れ再建されるなど、立地が水際であつたことが災いしてゐるのだろう。それに加え「増鏡」には、水無瀬離宮は後鳥羽院死後、大原の法華堂に移し建てられたという記述もあることから、物的証拠をみつけるのは難しいのかもしれない。

水無瀬神宮文書のなかに「永正十六年（一五二九）、勝幡寺縁起に後鳥羽院御廟は百山麓金谷にある」という記述がある。この金谷は、国鉄が敷かれた際、破壊、埋没してしまつたという。<sup>（註）</sup>発掘調査により早急に事実が明らかになることを望むが、島本町に水無瀬離宮があつたこと、それは何千首の和歌と書誌がその事実を雄弁に物語つてゐる。

ここで、本文の中で取り上げなかつた歌をいくつか紹介したい。音の響きや内容など、現在の私たちにも親しみやすい歌を選んでみた。

天の川いまは水無瀬になりななむ今日彦星の船路漕ぐべく

(元真集・藤原元真)

青柳の緑や底に映るらん深くもみゆる水無瀬川かな

(為忠初度百首・為忠)

思ひ出でや交野の御狩かりくらしかへる水無瀬の山の端の月

(西行法師家集・西行)

御祓する今宵は夏のみなせ川荒ぶる神も涼しかるらん

(夫木和歌抄・藤原隆祐)

散りかかる花の淵とぞなりにける水無瀬の川の春の湊は

(弘長百首・融覚(為家))

石走る音さへ涼し水無瀬川波にや夏のたちはなるらん

(守覺法親王集・守覺法親王)

此里は桜ぞちかき水無瀬山ほどはむかひの夕暮の空

(岩清水若宮歌合・経光)

水無瀬山川上遠く月見えて一むらのこる秋の夕ぎり

(雅世集・飛鳥井雅正)

夢むすぶ里は水無瀬のかり枕ちかき都の夢やたのまむ

(雪下集・二條西実隆)

みなせ山禁はまだき暮初めて夕日を残す淀の川波

(新明題和歌集・光雄)

久方の天の名におふ水無瀬川中瀬にたちて月を見るかな

(八十浦之玉・平春海)

水無瀬河ざざに雪の降りつみて春の水花下通ふらし

(藤蓑冊子・上田秋成)

ここで筆をおくにあたり、今回の詩歌の調査に始まり、この本を書き進めてきた意義を問うてみたい。私はそれを風景の再発見ではないかと考える。現在の島本町は住宅や線路が乱立し、先人たちが見た風景はもうそこにはない。しかし、水無瀬川と淀川の合流地点に立つて川上の天王山、そして川下の淀川の向こうの男山を見ると、谷崎が書いた次の文と不思議と同じ気持ちにさせられる。

「川の方の山のすがた、水のながめは、七百年の月日のあいだに幾分かちがつて來たであろうがそれでも院の御うたを拝してひそかに胸にえがいたものといま眼前にみる風光とはおゝよそ似たり寄つたりであつた」<sup>(註)</sup>

島本町を取り囲むなだらか山々と水無瀬川、まさに、「凡山凡水」の魅力。この悠然とした変わらない自然こそが、かつて後鳥羽院に繋がる多くの先人を魅了し彼らの想像力をかきたてた風景に他ならない。四季を楽しみ風雅に遊んだ今に繋がる先人たちの豊かな感性を通じて、もう一度島本の風景、



現在の島本の風景

歌枕「水無瀬」の風景、そして文化を見直す布石としたい。水無瀬・島本町に連絡と受け継がれる歌の伝統が、水無瀬の川のように流れ続けることを願うものである。

〔注〕

- (3) 『公文類纂・第六三編』昭和一四年 第九七卷1-2A-012等2275-100' 553
- (4) 村上重良「國家神道」岩波新書 昭和四五年 一八九頁
- (5) 中村直勝「水無瀬・山崎附近」京阪電鉄株式会社 昭和一四年 一〇〇頁
- (6) 「水無瀬神官文書」三〇頁
- (7) この歌は西行法師家集に入集しているが、西音法師の歌と考えられる。
- (8) 谷崎潤一郎「刺青・春琴抄」旺文社 平成九年 一〇三頁

## あとがき

島本町は、古来、水陸交通の要衝として歴史的な舞台となってきた所です。古くは日本人の最初のあゆみを示す旧石器時代の石器群に始まり、縄文・弥生・古墳時代といった各先史時代の遺跡も多数知られています。京都に都が置かれて以後、西国街道沿いに設置された「桜井駅」は、本町が都と西国を結ぶ交通の要衝であったことをよく示しています。

特に平安時代以来の天皇家の行幸地であった水無瀬の地に、鎌倉時代初期、後鳥羽上皇によって造宮された水無瀬離宮の存在は、その後の島本の歴史を語る上で欠くことができない中心的なシンボルといえます。この水無瀬や水無瀬川、水無瀬離宮といった地名は、その後の本町の歴史のあゆみのなかで、常に関連した事象が存在するといつても過言でないくらい重要な役割を果たすことになっていきます。

この度、島本町文化推進委員会で学習し、深めてきました後鳥羽上皇から中世以後の長い時代に読み継がれてきた詩歌が、京都造形芸術大学大学院在籍中に和歌に詠まれた島本町の地名を調べられ、数年にわたり御指導いただいた植田直子氏のご努力によつて発刊の運びとなつたことは、島本町の歴史・文化をこよなく愛する一人として望外の幸せであり、ぜひ、一人でも多くの方がこの書に触れ、町の歴史に対する関心を高めていただくことを願っています。

また、発刊にあたり、和歌山県立紀伊風土記の丘学芸員の加藤幸治氏、京都造形芸術大学教授の羽生

清氏、京都大学大学院の高田佳代氏のお力添えがなければ、本書の完成はありませんでした。ここに厚く御礼申し上げる次第です。

平成一六年三月吉日

島本町文化推進委員会会長

岩井 長信

お読みして訂正いたします。

あとがき（九六ページ）の文中で、  
京都大学大学院の高田佳代氏は  
高田佳代子氏の誤りです。

付録

水無瀬恋十五首歌合

恋十五首歌合 建仁二年九月十三夜 水無瀬殿

春恋

鶯のこほれる涙とけぬれど

なほわが袖はむすほほれつ

面影のかすめる月ぞやどりける

春やむかしの袖のなみだに

月のくるやよひの山のかすむ夜を

よよしとつけよまたずしもあらず

さてもまたなくさむやとてながむべき

そなたの空もうす霞みつつ

夢にだにみぬよなよなを恨みきて

衣はるさめしをれてぞふる

有家

宮内卿

おもひきや匂をおくる梅がえの  
うつりがをのみ身にしめんとは

権中納言公継

俊成卿女

親定

花の梢におぼろ月よを  
恋もせでながめましかばいかならん

前大僧正

左大臣

忘ればや花にたちまよふ春霞  
それかとばかりみえし明ほの  
うらみても心づからと思ひかな  
うつるふはなに春の夕ぐれ

定家

人しつれずおさへてむせぶひま」とに  
涙うちいづる袖の春風

雅経

夏 恋

さてもいかにいはかき沼のあやめ草

あやめもしらぬ袖の玉水

親定

はかなしや夢もほどなき夏の夜の

ね覚ばかりの忘がたみは

俊成卿女

身にあまるおもひをさて夏虫の

われひとりとや色に出づべき

宮内卿

しひあまりなくや五月のあま雲の

よそにてのみや山郭公

有家

よそにては軒の橋かをるよに

むかしがたりをしのぶとやみん

椎中納言公継

きかじただ人まつ山の時島

われもうちつけのさよのこゑ

椎經

草ふかき夏野わけゆくさを鹿の

ねをこそたてね露ぞこほるる

左大臣

ときぞとやよはの嵐をながむらん

とへかし人のしたのおもひを

夢にだにかさねぞかなるなつ衣

かへすとすればあくるしのめ

前大僧正

時鳥そらにつたへよ恋ひわびて

鳴くや五月のあやめわかずと

定家

秋 恋

よしさらばたのめぬやどの庭におふる

まつとなつけそ秋の夕かぜ

親定

野べの露は色もなくてやこぼれつる

袖より通ぐる萩の上風

前大僧正

我がこころいかにかすべきさなきだに

秋の思ひはかなしきものを

椎中納言公継

こよひしも月やはあらぬ大かたの

秋はならひを人ぞつれなき

定家

鳴きわたる雲ゐのかりの涙さへ

家隆

露おく袖のよはのかたしき

後成卿女

かれなで人をなにしたふらん

雅経

ながめしや心づくしの秋の月

おちつもる涙の露はさよ衣

露のかごとも袖ふかきころ

雅経

さえても袖にみえける物を

宮内卿

せく袖に涙の色やまさるらん

しばしこそよそにみぎはのうす氷

雅経

ながむるままの萩の上の露

とけでもやまじむすぼほるとも

有家

物思はでただ大かたの露にだに

うつりゆくまがきの菊もをりをりは

有家

ぬるればぬるる秋のたもとを

なれにしころの秋をこふらし

親定

物おもふ袂はいはじしかのねは

冬の夜にいくたびばかりね覚すと

宮内卿

ただ大かたのね覚なりけり

いふもまどろむひまなからめや 権中納言公継

宮内卿

思ひいづる身はふか草の秋の露

いたづらに千鳥なくなる河風に

前大僧正

たのめし末や木枯の風

思ひかねてもゆく方ぞなき

家隆

冬 恋

あし鳴のはらふつばさにおく霜の

きえだにやらず山もしのみに  
かよひこしやどのみちしばかれがれに

家隆

きえかへりてもいくよへぬらん

あとなきしものむすぼほれつ

後成卿女

しもははやふるのなか道なかなかに

床の霜まくらの氷きえわびぬ

むすびもおかぬ人の契に

定家

かよひたえにし庭の朝露

宮内卿

おも影もまつ夜むなしき別にて

定家

つれなくみゆる在明の空

忘れずよいまはの心つくばねの

家隆

もりあかす水のしら玉いまはとて

左大臣

嶺のあらしに在明の月

雅経

たゆむもしらぬ袖の上かな

涙さへ鳴のはねがきかきもあへず

あくるまをなにうらみけん逢ふことの

君がこぬよの暁の空

名残にいまは恋しきものを

権中納言公継

しら露のおきてわびしき別をも

いかにせんこぬ夜あまたの袖の露に

あふにぞかこつ在明の月

親定

暮恋

またこんといひて別れしなごりのみ

月をのみまつ夕暮の空

ながむる月に在明の空

有家

ながめつつまたばとおもふくもの色を

親定

たのめつるよ半もいまはの袖の雨に  
月さへくもるあり明の空

前大悟正

たが夕暮と君たのむらん

定家

をしみかね別れしよりもかずかずに  
おもふかたみのあり明の空

俊成卿女

いまこんとただなほざりのことのはを

宮内卿

いまはただ風やはらんうき人の

あぢきなくそへし心のかへりこで

ゆくらんかたの夕ぐれの空

雅経

はらひもあへず暮こぼれつ

定家

なにゆゑと思ひもいれぬ夕だに

待出でしものを山のはの月

左大臣

しのはらやしらぬ野中のかり枕

家隆

いかにせん待つべしとだに思ひよらで

くれゆくかにうち時雨れつ

前大憎止

まつもひとりの秋かぜのこゑ

有家

身にぞしむ人なき床の夕まぐれ

俊成卿女

武藏野やひとり思ひにむせぶかな

雅経

いまはただまたれしあとの夕暮の

家隆

草まくらむすびさだめんかたしらず

親定

くもるばかりぞかたみなりける

権中納言公継

きつつなれにしつまもこもらで

左大臣

萩のはに風うちそよぐ夕暮や

有家

君ももしながめやすらんたび衣

権中納言公継

人を恋しとおもひそめけん

俊成卿女

なはぬよはの夢のかよひぢ

忘れじの契むすびし枕さへ

おもふことの身にしみまさるながめかな

家隆

あさたつ月を空にまがへて

権中納言公継

雲のはたての空の秋かぜ

有家

うつの山うつつかなしき道たえて

権中納言公継

轟中恋

君ならぬ木のはもつらし旅ごろも

葛の色に袖をあらそふ旅ねには

俊成卿女

うつともかなしうつの山本

前大僧正

かたしく雲やうちしぐるらん

有家

めぐりあはん程をいつともいふべきに

宮内卿

山かけや山鳥のをのながきよを

前大僧正

たよりだになしうつの山いえ

宮内卿

我ひとりかもあかしかねつつ

前大僧正

山家恋

君しるや都もよそに嶺の雲

雅経

人とはぬころだにつらき山ざとの

はれぬ思ひにながめわびつつ

雅経

月に心の松風のこゑ

俊成卿女

ひとりふすまやの板まのあまそそき

権中納言公継

わすらるる人めはいつもかれにけり

おつる涙のかずそへむとや

権中納言公継

誰山ざとの冬とまつらん

家隆

我が身ひとつ秋の夕ぐれ

宮内卿

山がつのあるさごろもをさをあらみ

左大臣

故郷恋

さとはあれぬをのへの宮のおのづから

まちこしよひも昔なりけり

親定

あはで月日やすぎふける庵

左大臣

風ふけばさもあらぬみねのまつもうし  
恋せん人はみやこをすめ  
身をしれば思ひもよらで杉の庵に

末までとちきりてとはぬ故郷に

親定

なほさりともと松風ぞふく

親定

思ひわび涙ふりそふ嶺の庵に

むかしがたりの松風ぞふく

左大臣

庭もまがきも野べの秋風

有家

旅泊恋

さざ浪やしがの故郷いくかへり

わすれがたみの袖ぬらすらん

家隆

色にみよ袖に時雨のふるさとの

みかきがはらの秋のおもひは

前大僧正

とぶとりの飛鳥のさとに秋深けぬ

出でにし人はおとづれもせで

俊成卿女

離にはしかも羈れきて妻こふと

きくに袂ぞいとど露けき

權中納言公継

契りしもあらずなりける面影は

ありしながらのわたりなれども

宮内卿

つれなきをまつとせしまのはるのくさ

くちぬ心のふるさとの霜

定家

人ふるすさとをもなにかいとふべき

我が身ひとつうき名なりけり

雅経

うき枕浪になみしく袖の上に

前大僧正

都おもふ心のはてもゆくへなき

あかしのおきのうきねなりけり

俊成卿女

いまはとてあかで出でにし曙の

みなのみなとは月ぞかはらぬ

宮内卿

しるらめや風のたよりを待ちわびて

袖に浪たつかぢ枕すと

權中納言公継

忘れぬは涙の月にうれへつつ

身をうしまどにとまる舟人

定家

おもふ人をうきねの夢にみなと河

さむる袂にのこる面かけ

親定

思ひねの夢ぢに人をみなと河

さむればもとのうきねなりけり

有家

舟とむるむしあけの磯の松のかぜ

たが夢ぢにか又かよふらん

前大僧正

月ぞかさなるなれし面影

家隆

あはれとおもふねになきてこし

俊成卿女

までとしもたのめぬ穢のかぢ枕

左大臣

たえはつる人やはつらき心から

宮内卿

むしあけの浪のねぬよとふなり

左大臣

名さへうらめしあふさかの闇

宮内卿

かたしきの袖もうきねのなみ枕

雅經

我が恋やこよひをせきとすずか川

左大臣

ひとりあかしのうらめしの身や

雅經

すずろに袖はかくはしをれし

左大臣

ひとりあかしのうらめしの身や

雅經

これも又闇もれとやは清見がた

左大臣

あづまぢやひとりたびねの日かずへて

前大憎止

恋をのみすまの闇屋のいたびさし

左大臣

涙せきあへぬあしがらの闇

前大憎止

さして袖とも浪はわかじを

定家

いかでいはんかくこそありけれ闇もりも

前大憎止

すまのうらや浪に面影たちそひて

定家

いづらなこそそのなをこたへけん 権中納言公継

前大憎止

せき吹きこゆる風ぞかなしき

定家

わすらるるうき名もすすげきよみがた

前大憎止

すまのうらや浪に面影たちそひて

定家

闇のうへこす浪の月かけ

家隆

海辺恋

定家

みし人の面影とめよ清みがた

雅經

契りしを我が身ひとつにまつしまや

俊成卿女

袖にせきもる浪のかよひぢ

雅經

をじまのあまの跡ばかりして

俊成卿女

あふさかのゆふつけ鳥よなれをしそ

雅經

まつしまや恋せぬあまのぬれ衣

俊成卿女

ぬれてもしばしほさぬ物かは

有家

とへどもまたじすまの浪かぜ

家隆

いかにせん思ひありその忘がひ

親定

川辺恋

かひもなぎさに浪よする袖

親定

はつせ河ゐでこす浪の岩のうへに

おのれくだけて人ぞつれなき

左大臣

ともとみて伊勢をのあまにやどからん  
物おもふ身は袖もかわかず

宮内卿

なとり河わたればつらし朽ちはつる  
袖のためしのせぜの埋木

左大臣

うちわすれもにすむ虫はよそにして  
すまのあまりにうらみかけつる

左大臣

我がためにさて山がはのせになびく  
たまもかりそめにかわくまもなし

定家

契りきなさてやはたのむ末の松  
まつにいくよの浪はこえつつ

雅経

ながれての契りをよそにみなせ川  
かけはなれゆく水のしら波

定家

心ある伊勢をのあまのぬ衣  
ほすべき浪のをりをしらばや

前大悟止

あすか河契はおなじむかしにて  
ささのくまひのくま河にぬるる袖

俊成卿女

別のみをじまのあまの袖ぬれて  
またはみるめをいつかかるべき

定家

かはる名のみやせにのこるらん  
ささのくまひのくま河にぬるる袖

宮内卿

いそなつむ伊勢のあま人我が袖を

たぐひとみえんことやかなしき  
もしはたれひるまもなきをわくらばに

権中納言公継

しらざりつ身はすゑまつるみそぎ河

雅経

神さへうけぬ思ひせんとは 権中納言公羅  
ちどりなくかはべのちはら風さて

家隆

さののわたりのむら雨の空  
おもふことそなたの空となけれども

定家

あはでぞかへる在明の空

家隆

いこまの山の雨の夕ぐれ  
ながめわびたえぬ涙や雨となる

親定

ともすればなき名たつ田の河浪に  
げにぬれぎぬをしほりつるかな

前大僧正

はれぬ雨のくもりそめん雲やなき  
しぐるる空にまがふ夜の雲

雅經

音羽河せきいるる水のせをあさみ  
たえ行く人の心をぞみる

有家

恋よりたてし煙なりけり  
年へたる思ひやいとどふかき夜の

前大僧正

### 寄雨恋

雨ふれば軒のしづくのかずかずに

権中納言公羅

こぬ人を待つよながらの軒の雨に  
月をよそにてわびつつやねん

宮内卿

思ひみだれてはるるまぞなき  
ふりにけり時雨は袖に秋かけて

左大臣

いひしばかりをまつとせしまに

後成脚女

わびつつもうちやはねぬるよひの雨に  
やがてふけ行く鐘の音かな

家隆

あれまもる雨も涙もふるままに  
えならぬ床に露まさるらし

有家

### 寄風恋

ゆくへなきやどはととへば涙のみ

きくやいかにうはの空なる風だにも

まつにおとするならひありとは

宮内卿

身にしむ色の秋風ぞふく

定家

うちなびく草ばにもろき露のまも

涙ほしあへぬ袖の秋風

有家

いまはただこぬよあまたにさよ深けて  
またじとおもふに松風のこゑ

雅経

ひとりのみふじの山かぜやむこなく

恋をなどてかするがなるらん

權中納言公継

いかにせん身はならはしのものとでも

軒ばの松に秋風ぞふく

家隆

わくらばにとひこしころにおもなれて

さぞあらましの庭の松かぜ

親定

いかにせんなくさむやとてむすぶ庵に

猶松かぜの嶺に吹くなる

前大僧正

萩原やよそにききこし秋風の

左大臣

物おもふくれは我が身ひとつに

きえかへり露ぞみだるした萩の

すゑこす風はとふにつけても

俊成卿女

しろたへの袖のわかれに露おちて



水無瀬三吟百韻 長至二年正月二十二日

初の僕紙の表八句

雪ながら 山もとかすむ 夕かな

行く水遠く 梅にほふ里

河風に 一むら柳 春見えて

舟さす音も しるき明けかた

月や猪 霧わたる夜に 残るらん

霜おく野原 秋は暮れけり

鳴く虫の 心ともなく 草かれて

垣根をとへは あらはなる路

初の僕紙の裏一四句

山ふかき 里や風に おくるらん

なれぬすまるそ さひしさもうき

宗祇

肖柏

宗長

祇

柏

長

祇

柏

長

祇

柏

長

今更に ひとりある身を 思ふなよ  
うつろはむとは かねて知らずや  
置きわふる 露こそ花に あはれなれ  
また残る日の うちかすむ影  
暮れぬとや 鳴きつつ鳥の 帰るらむ  
み山をゆけば 分く空もなし  
晴るまも 袖はしぐれの 旅衣  
わか草枕 月ややつさむ  
いたづらに あかす夜おほく 秋更て  
夢にうらむる 萩の上風  
見しはみな 故郷人の 跡もなし  
老のゆくへよ 何にかゝらむ

祇 長 柏 祇 長 柏 祇 長 柏 祇 長 柏

二の懐紙の表一四句

色もなき ことの葉をたに 哀しけれ  
それも友なる 夕暮の空  
雲にけふ 花ぢりはつる 嵐こえて  
きけはいまはの 春のかりかね  
おほろけの 月かは人も まてしはし  
かりねの露の 秋の明ほの  
末野なる 里ははるかに 霧立ちて  
吹きくる風は 衣うつ声  
牙ゆる日も 身は袖うすき 暮ことに  
たのむもはかな 巣木とる山  
さりともの この世の道は つきはて、  
心細しや いつちゆかまし  
命のみ 待つことにする きぬきぬに  
猶なになれや 人の恋しき

柏 紙 柏 紙 柏 紙 柏 紙 柏 紙 柏 紙 柏 紙 柏 紙

二の懐紙の裏一四句

君を置きて あかすも誰を 思ふらん  
その佛に 似たるたになし  
草木さへ ふるき都の 恨にて  
身のうき宿も 名残りこそあれ  
たらちねの 遠からぬ跡に なくさめよ  
月日のすゑや 夢にめくらん  
この岸を もろこし舟の かきりにて  
又生れこぬ 法を聽かはや  
遂までと 思の露の きえかへり  
身をあき風も 人たのめなり  
松虫の なく音かひなき 蓬生に  
しめゆふ山は 月のみそすむ  
籠にわれ た、あらましの 寝覚して  
いた、きけりな 夜な夜なの霜

柏 紙 柏 紙 柏 紙 柏 紙 柏 紙 柏 紙 柏 紙 柏 紙 柏 紙

三の懐紙の表一四句

冬枯れの 声たつわひて 立てる江に  
夕沙風の 遠つ舟人  
ゆくへなき 霞やいくつ はてならん  
くるかた見えぬ 山里の春  
茂みより たえたえのこる 花落ちて  
木のした分る 道の露けさ  
秋はなど もらぬ岩屋も 時雨るらん  
苔のたもとに 月はなれけり  
心ある かきりそしるき 世捨人  
おさまる浪に 舟いつる見ゆ  
朝なきの 空に跡なき 夜の雲  
雪にさやけき 四方の遠山  
峯の庵 木の葉の後も すみあかて  
さひしさならふ 松風の声

柏 柏 柏 柏 柏 柏 柏 柏 柏 柏 柏 柏 柏 柏 柏 柏 柏 柏 柏 柏

三の懐紙の裏一四句

誰かこの 晚おきを かさねまし  
月はしるやの 旅そかなしき  
露ふかみ 霜さへしる 秋の袖  
うす花す、き 散らまくも惜し  
鶴なく かた山くれて 寒き日に  
野となる里と 佗ひつゝそすむ  
帰りこは 待ちし思を 人やみむ  
うときも誰か こゝろなるへき  
昔より たゝあやにくの 恋の道  
わすられかたき 世さへうらめし  
山かつに なと春秋の しらるん  
植ゑぬ草葉の しけき柴の戸  
かたはらに 垣櫛のあら田 かへし捨て  
ゆく人かすむ 雨の暮れかた

紙 長 柏 柏 紙 長 柏 紙 柏 長 紙 柏 柏 紙 長 柏 紙 柏 柏 紙

名残の懐紙表一四句

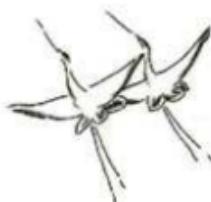
宿りせん 野を鶯や 駄ふらむ  
小夜もしつかに 桜咲くかけ  
灯を そむくる花に あけそめて  
誰か手枕に 夢は見えけん  
契りはや 思ひたえつ、 年も経ぬ  
今はのよはひ 山もたつねし  
かくす身を 人はなきにも なしつらむ  
さてもうき世に かゝる玉の緒  
松の葉を たゞ朝夕の 煙にて  
浦わの里は いかにすむらん  
秋風の あら磯枕 ふしわひぬ  
雁なく山の 月更くる空  
小萩原 うつろふ露も 猶やみん  
あなたの大野を 心なる人

名残の懐紙の裏八句

忘るなよ かきりやかはる 夢うつ、  
思へはいつを いにしへにせむ  
仏たち 隠れても又 いつる世に  
枯れし林も 春風そ吹く  
山はけさ いく霜夜にか 霞むらん  
煙のとかに 見ゆる仮庵

いやしきも 身ををさむるは 有つへし  
人におしなべ 道は正しき

宗祇(六八歳) 三四句  
肖柏(四六歳) 三三句  
宗長(四一歳) 三三句



## **島本町文化財調査報告書**

### **第6集**

---

発 行 島本町教育委員会  
〒 618-8570 大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号  
TEL 075-961-5151

発行日 平成16年3月31日

印 刷 三星商事印刷株式会社  
〒 604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
TEL 075-256-0961



